第四章　金葉集に於ける俊頼の歌の位相

(一)　春の歌

この節においては俊頼の歌を中心にその周辺の他の歌との位置づけを考え、併せて金葉集撰進に際して俊頼の選歌意識を究めてゆきたい。金葉集初度本に始まり、二度本、三奏本と改修するたびに金葉集の歌数は漸次減少

してゆくのであるが、その間にあつて撰者自身の後頼が自己の作品の処遇配列をどのように位置づけているかということは、彼の撰歌意識を知る上に極めて必要なことであり、以下このことを中心にまず春の歌から考えてゆく。

勅撰集はもとよりであるが、家集にしてもこれを編集するという事業については、ただ単に歌を無計画に配列するのではなく、そこには一定の規準が伝統的にほぼ、規制されて

いる。

まず、金葉集十巻についてみるに四季の配列・賀歌・別離・恋歌・雑部の基本的配列の構造をもつ。これは勅撰集二十巻の圧縮した形である。さらに、これを細部に検討してみると例えば春の歌には、春の歌としての主題の配列展開がきちんと整理されている。今、初度本における「春部」の素材を分類してみると、立春・霞・雪・鶯・梅・子日・若菜・柳（以上一月）、呼子鳥・山彦・雁・櫻・早蕨

・桃（以上二月）、春月・春駒・杜若・春田・苗代・山吹・躑躅・藤・三月尽（以上三月）

といった順に配列されている。これは、同じ春部のもつ素材景物の配列展開を意味する。

つまり、立春に始まり、三月尽に終る二十三の季節的主題なのである。同じ春にしても当然そこには正月・二月・三月という推移を中心として流動展開する季節的主題が内包されている。勅撰集としての金葉集にはこの月別の名はないだけで、下部構造の歌の主題は

完備されている。この春部をさらに正月・二月・三月、夏部を四月・五月・六月という月の区別を設定し、それに従って具体的作品を配列、編集されたのが彼の家集「散木奇歌集」の配列方法であった。

勅撰集には、月の区別こそないがこのような規格の中に歌の素材的主題は展開する。全集の如く初度本から三奏本へと複雑な撰述過程を辿り、歌は漸次減少してゆく方向をとる。しかし、この主題そのものには、さした

る変化はなくその中に於て或は追加され、或は削除されてゆくのである。

さて、俊頼は「俊頼髄脳」の中に詠歌の主題について四季別に説明してその見解を述べている。

「たとへば春の朝に、いつしか歌を詠まんと思はば、佐保の山辺に霞の衣着せつれば、春風に吹きほころばせ、岸の柳を隔つれば、心をやりてあくがらせ、梅のにほひにつけて、鶯をさそひ、子の日の松につけても、

コクヨ B4 20×20

心の引く方なれば、千世をすごさん事を思ひ、若菜をかたみに摘みためても志のほどを見え、残りの雪の消えうせぬるに我身のはかなき事を慨き、花咲きぬればひとり心の静かならず、白雪にまがへ、春の雪かとおぼめき、心なき風を恨み、人ならぬ雨をいとひ、青柳の糸に思ひよりぬれば、思ひ乱るともくり返し、木のもとに立ち寄らん事をいひ、草萌えいでなにつけても早蕨を疑ひやまひにもなりぬれば、山がつの園生

に立てる者の姿につけてもすける心をあはれび、三十歳になるといふなる桃の今年初めて咲きそめるかと疑ひ、春の空しく過ぎぬるにつけても、徒らに歳を送る事を慨き、いつしかと時鳥を待ちやすき夢をだに結ばず。云々」（本文は、日本歌学大系本による）

と春の景物だけでもその主題は多く、以下文章はなお続き四季折々の詠歌の美的対象をとりあげ、自然への発想契機を求めている。

かく一年十二ヶ月を夫々の時節の歌に配列してゆくのが俊頼に限らず、古今集以来の部

立の構成であった。

今これを金葉集においてみると、俊頼の選歌意識は、まず、一月に於て最初の主題として立春をとりあげ、初度本巻頭に紀貫之の

① としのうちに春立つことを春日野の［わか］なさへにも知りにけるかな

を置き

② ［みちのくの］こころもめせきをけさたちて［いつ］の間にかは春のきつらん（覚雅法師）

（注・［　］は欠字の部分）

③ いつしかとけさは氷もとけにけりいかでみぎはに春を知るらん（源俊頼朝臣）

と三首を配列させたのであるが、古今集歌人の貫之の歌を巻頭に覚雅法師を二番目に置いたのが白河法皇の御意に副わず却下された事はすでに述べた通りである。

この二首を削除されることになると、配列に働く俊頼の美的統一意識がおのづから破れることになり、さりとて自己の作品を巻頭に持ってくるのは八代集にもその例はなく、結

局「いつしかと」の自歌は削除せざるを得なくなった。

これは歌の良否ということではなくて勅撰集編纂技術面からこの歌の存在意識を喪失した事によるのである。「いつしかと」の歌は詞書に「としの始めの歌としてよめる」とあり又、散木奇歌集には「立春日よめる」ともあり、勅撰集たる金葉集の立春の歌として自詠の歌を三番目に配列した事は意味のあることであった。がもと〳〵この歌としても古今集的

温雅さで「袖ひぢてむすびし氷の氷れるを春立つ今日の風やとくらん」という貫之的な発想の歌ではあり、当時の歌壇としてはすでに古いものになり、かたや一方には以上の理由でその行き場がなくなって削除の運命にあわざるを得なかった。

続類従本において新たに巻頭を飾ったのは、貫之に代るに當代歌人顕季の

①うちなびき春はきにけり山河の岩間の氷今

やとくらん

コクヨ B4 20×20

の一首を持ってきた。この歌は、堀河院歌壇の中核をなす「堀河院百首」の中における「はるたつ心をよめる」と題した歌であり、古典歌人貫之に代るに近代歌人顕季のこの交替は白河院の御思召をうけて余義なく俊頼の勅撰集編集上に具現した新しさを示すものであった。新しさというてもこの歌は古今集的発想を温存した歌で「古今集巻頭」年のうちに春はきにけり一年をこぞとやいはんことしとやいはん（在原元方）と「袖ひぢて むすびし

水の氷れるを春立つ今日の風やとくらん（紀貫之）との抒哀的な歌である。

ところで削除された俊頼の歌の代りに同じく自歌

②庭もせに引つらなれるもろ人の立ねる今日や千代の初春

を配した。この歌も「堀河院百首」の中の一首である。歌の内容から見ても巻頭の「岩間の氷今日やとくらん」に対して「諸人の立ねる今日や千代の初春」という呼応もある程度

の展開はみられるが、よく考えてみるとこの歌は自然美そのものを対象とした歌ではなく、新春における禁裡百官の様子を「千代の初春」ということばいだいわば配列の展開からは孤立的新春詠とみられる。むしろその点では削除された「いつしかの」の方が新春詠としてはふさわしい。また、現に「庭もせに」の次には公実の

③春立て梢にきえぬ白雪はまだきにさける花かとぞみる

があり、ついで皇后宮肥後の

④つらゝゐしほそ谷川のとけゆくは水上より

や春は立らん

とつづきその次に覚雅法師の⑤「みちのくの

衣の関」をなお削除せずに生かして、太宰大

貳長実の

⑥いつしかと春のしるべに立物はあしたの原

の霞なりけり（初春の心をよめる）

⑦春のくる夜の間の風のゝかなれば今朝吹く

にしも氷とくらん（前斎宮内侍）

とつづく。この七首の配列を考えてみると、俊頼と、覚雅の歌のあるのは、やや杜撰ではなかったかと思われる。ただ俊頼はその後散木奇歌集の春部正月の巻頭に「堀河院御時百首歌めしけるに元日の心とつかふまつれる」として「庭もせに」の歌をおいている。こうした家集の巻頭におくべき歌としての氣持もこの時すでにあったせいか、元日の心ではあるが、前述の通り歌を配置したのは必ずしも勅撰集としては望ましいものではなかった。

それのみか「堀河百首」をここでは①②③④①とずらつと五首一括配置しているのは「堀河院百首」が素材を与えてくれるにふさわしい百首詠であったかも知れぬが、かくも一度に多くの歌を同一の百首詠から採用したことは、返却されて早々再び着手せねばならなかった理由によるものでやはり急ぎすぎた材料の蒐集であったと思わざるを得ぬ。

こうした事から「庭もせに」の歌は二度本においては、削除している。これは又當然な

改修であり、三奏本においてもこの歌は復活する余地はなかった。結局、三奏本においては、巻頭に拾遺集春の歌源重之の「よしの山みねのしらゆきいつきえてけさはかすみのたちかはるらん」を新たに配置し、顕季の「うちなびき」はそのため、続類従本、二度本共に巻頭であったのが二首目に転位し、後顕の歌は初度本と続類従本に顔を出しただけで、二度本・三奏本では削除されてしまったのである。

さて、一月の次の主題は「霞」であり、初度本においては霞の歌を六首採用し、俊頼は

○波たてる松のしづえをくもでにてかすみ渡れるあまの橋立

の自歌を採用した。これは堀河院百首の中の一首である。霞の歌としては初度本には、

(1) くらはしの山のかひより春霞としをつみてやたちわたるらん　（朝忠）

(2) ふるさとは春めきにけりみよしののみかきがはらも霞こめたり（兼盛）

(3) あづさゆみ春のけしきになりにけりいなさの山に霞たなびく（長実）

(4) あさみどりかすめる空のけしきにやときはの山は春をしるらん（公教母）

(5) としごとにかはらぬものは春霞たつたの山のけしきなりけり（題輔）

と続き(6)に前記俊頼の歌がある。この六首はそれぞれ内容、用語に関聯をもちつゝ霞を主題として展開した歌で、「入佐山」「ときはの山」「竜田山」「天の橋立」などの歌枕

を構成的要素としておりこんだのも俊頼としては意図的に霞の歌を展開させるためのものであったろう。ところが、六首の歌のうち俊頼の歌は格調からみて、やや他の作品と異なったものがあり、上句の対象への素材発見は類型的な霞の歌とは異質的な俊頼独自の「霞」の歌が現出する。たとえば、(4)をうけて(5)は春のかすんだ景色を主題としているのに俊頼の歌になると、この二つの連続した景物を中断するかく別な「天の橋立」にみようとす

る。この展開は必ずしもスムースではない。俊頼個人の素材の切り込み方をここに見る思いがする。そうした意味もあってか、続類従本では遂にこの歌は削除している。(1)・(2)の歌はいずれも天徳四年（村上天皇）歌合という古さからこれを削除した。そしてここに新たに「いつしかとあけゆく空のかすめるは天の戸よりや春は立らん」（顕仲）の歌を初度本(4)「あさみどり」の前に挿入し、(3)の「あづさゆみ」の歌を(5)「としごとに」の次に移

動させ、削除された俊頼の「波たてる」の歌の代りに今じく自作の

○いつしかと末の松山かすみあひて風とともにや春はこゆらん

の一首を配置した。この配列は俊頼も相当考えた結果であり、こうなると歌枕としても「立田の山」→「いるさの山」→「末の松山」という順になり、主題たる「霞」も動的な流れに沿うて生きたものになつてくるのである。

また、この「いつしかと」の歌は「波立て

る松のしづ枝を」の個性的な歌よりも温雅さがあり勅撰集としてはこの歌の方が適当と俊頼も思つた故だろう。しかし、この「いつしかと」の歌も二度本に於ては折角続類従本に新しく挿入させた藤原顕仲の「いつしかとあけゆく空の」と共に削除してしまつた。それは歌の漸減のためにとつた態度であろう。三奏本は、さらに減少させる方針にたつている

が結果に於ては、初度本の(1)(朝忠)(2)(兼盛)を復活させ、(4)(少将公教母)(5)(顕輔)

の四首になった。すなわち、「霞」の主題をめぐった歌が初度本六首→続類従本五首→二度本三首→三条本四首の数におちついた。これは編集の内容からみると三条本は二度本よりは初度本に接近した方法をとったことになる。後頼の「なみたてる」と「いつしかと」は初度本と続類従本のみに顔を出しただけで、遂に三条本では二首とも削除されてしまった。「なみたてる」は、詞花集巻第九（雑上）に勅撰集として残った歌である。

◎

次に春の主題として「雪」があるが、これには俊頼の歌はない。次は「鶯」である。初度本において鶯の一連の歌は十一首であり、この中に俊頼の

○春雨に降りしむれども鶯の声はしほれぬものにざりける

の一首がある。今、この十一首をあげる。

（注・上の◎印は天徳四年内裏歌合）

(1) 氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声

（源順）

◎

(2) わが宿に鶯いたくなくなるを庭もはだらに花や散るらん（平兼盛）（入拾遺集）

（なれば）三奏本

(3) 今日よりや梅の立枝に鶯の声さとなるゝはじめなるらん（春宮大夫公実）

(4) 鶯のなくにつけてやまがねふく吉備の中山春をしるらん（修理大夫顕季）

（やま人）三奏本

(5) 今日やさは雪うちとけて鶯の郁にいづる初音なるらん（顕輔朝臣）

(6) 俊頼の歌

コクヨ B4 20×20

(7) 鶯の梅の花笠散りぬればふる春雨にそぼちてぞなく

（藤原 房真）

(8) 鶯の木づたふさまもゆかしきに今一声はあけはてゝ鳴け

（源 雅兼朝臣）

◎ (9) わが宿の梅が枝に鳴く鶯は風のたよりにそをやとめにし

（中納言朝忠）

◎ (10) 白妙の雪ふりやまぬ梅が枝に今ぞ鶯春となくなる

（平 兼盛）

(11) あふ坂に今日もとまりぬ鶯の鳴く一声や春は関守

（藤原頼朝臣）

この十一首の中、回印四首は時代的に古いため続類従本・二度本では削除され、三奏本になって再び復活したという経緯をもつ歌である。俊頼の「春雨は」（但し、初度本では「春雨に。」散木集は「春雨は。」）は三奏本に至って削除された。

この初度本十一首の配置については俊頼も前の主題同様かなり考えて並べたもので、前五首は「鶯の初音」のさま、後六首は「鳴きさかっている鶯」の様子と二つに大きく区切ったも

のである。ところでこれを、続類従本におい
ては、天徳四年歌合の歌四首を削除しあとの
金葉集歌人七首の配列順序を、④③⑤⑧⑥⑦
⑪の順に変えている。変えた理由は用語など
の上から連結を緊密せしめようとした配慮か
らなされたものであり、更に二度本では、⑦
⑪の二首を削除し五首にしぼった。その他の
順位は、続類従本と全く同じ。ただ、三奏本
では俊頼が種々続類従本、二度本と修正上苦
労して考えてきたのであったが結局、①②⑨

⑩の天徳四年内裏歌合の四首を復活させ、初度本における鶯の初音をよんだ五首の歌のみをそのままの順序に採用し、鳴きさかる鶯の声は、非肉にも古い天徳四年歌合の⑨⑩のみをのこし、他は全部削除した。その削除の歌の中には俊頼の「春雨に」の歌も又いれざるを得なかったのである。そして新たに一首、三奏本になって始めて「玄々集」から⑨の歌を添加したという結果になった。

次は梅の主題である。

コクヨ B4 20×20

ここで注意すべきは、初度本に於ては俊頼の歌はとられていないことである。続類従本になって始めて「梅花散水といへる事をよめる」の題は

散る花は水の岩間に淀むとも香は流れてや瀬にとまるらん

の一首が挿入された形で採っている。この梅の花にしても、「咲く梅」と「散る梅」の二つに区分して五首が構成されている。俊頼の歌は、散る梅を主題としている。この歌は

「散木奇歌集」には「散積る花こそいはによどむとも香は流れてやせにかほるらん」とかなり本文に異同がある。二度本の時に、かく後頼が変えたものであろう。今、初度本における三首の歌を示すと次の通り。

(1) 今日ここに見に来ざりせば梅の花ひとりや春の風に散らまし（大納言経信）

(2) 散りかかる影は見ゆれど梅の花水には香こそうつらざりけれ（藤原兼房朝臣）

(3) 咲けば散る梢のみかは梅の花たがるる水も

とまらざりけり（源雅兼朝臣）

以上三首の中に、俊頼は続類従本において

文経信の①の歌の次に自詠のA「散る花を」の歌をすぐつづけて挿入し、更に②の次に源忠季のB「限ありて散りはつとも梅の花香をば梢に残せとぞ思ふ」を入れ、③は削除した。従って歌の配列は①↓Ⓐ↓②↓Ⓑとなる。この順序は、挿入ということだけで移動はない。つまり歌の情趣的連結は、①に於ては閑庭に散る梅花をよみ、Ⓐでは流れる水に散り

ゆく梅の花を、②では、同じく水と梅の香の映発、更にⒷで梅の梢にのこす香りをよむというようにして展開して ゆく相をみる。③を省略したのは、水に関する梅が自詠を入れたため三首もつづくということで削除せざるを得なくなったのである。ところが拝角、続類従本に入れた自詠の歌を二度本では削除してしまった。（三奏本も同じ）そのため二度本（注）では①↓②↓Ⓑということになり松田博士もすでに指摘されている如く「香」を中心とす

る三首が余り多すぎるために俊頼の自詠を結局削ったものであろう。三奏本では更にこの歌の順位を⑬→②と変更させている。これは「散りはばつとも」といった願望をこめ「梅の枝に香をのこせ」を先にもってきて、最後に水上に散りかかる梅の花をもってきた方が振りもよいし情景の自然的推移とみたものである。自詠を前陳しても俊頼は勅撰集の全体的構成を考えた方針をもっていたことをこの例にみることが出来る。この事は言いかえれ

ば歌人俊頼というよりもまず勅撰集編者としての自覚を重要視した俊頼の態度のあらわれであった。「散る花は水の岩間に」の歌は、続類従本にはかなくも存在して遂に消えてしまった歌であった。

次の主題は「子の日」であるが、これには俊頼の歌はなく、次の「若菜」になって採用しているが、ここでも梅の主題の場合と同じく彼の「若菜」の歌は、初度本に於てはとられていない事で続類従本になって始めて「百

首の歌の中に、子日の心をよめる」として

。「春日野の雪を若菜に摘みそへて今日さへ

袖のしほれぬるかな

を描入の形で匡房の「春霞立ちかくせども姫

小松ひくまの野べに我は来にけり」と共に二

首補入させた。

初度本の子の日の歌は次の二首である。

(1) よろづよのためしに君がひかるればねのひ

の松もうらやみやせん（未染）

(2) 春日野のねの日の松はひかでこそかみさび

ゆかんかげにかくれめ（大中臣公長朝臣）

さて、続類従本では、(1)を削り、②の次に俊頼自詠の「春日野の雪を」を補入し、更に匡房の歌を補入したのは②の連続から順当な配列である。

①の削除は拾遺集の歌人であったからであろう。俊頼の歌の中には、若菜の主題をかいえこみ、子の日の歌の中に、花摘せしめようとした編集意図がみえる。散木奇歌集にも俊頼のこの歌の題詞は「百首の歌の中に若菜をよめる」とある。ところが二度本

コクヨ B4 20×20

三奏本においては、俊頼のこの歌は遂に姿を消してしまった。二度本に於て自詠を削除したことは、「子の日」の主題本来の編集態度に立ち帰ったためと思われる。又、考えてみると、この歌自体「若菜」の歌であるのを〈堀河百首〉「百首の歌中に子日の心をよめる」と題詞をかえていることの中には、「若菜」を「子の日」の中に含ませた考え方によるものである。「堀河百首」の中にも俊頼は「子日」の歌として「祝ひつゝ今日しも松をひ

きつれば はつねぞ千世の始なりける」という
れつきとした歌がある。しかしこの歌を入れ
ずに「春日野の雪」を入れたことは、前の公
長の「春日野の子の日の」を受けるにふさわ
しかったものとして考えたからであらうが主
題に立帰る態度からすれば折角続類従本に一
度入れたものの俊頼の歌の存在理由はうすく
なり、続類従本に於て補入した今一首の匡房
の歌は「子の日」の主題にも合致していたの
で二度本においてもこれはそのまゝ残存せし

春イ

コクヨ B4 20×20

める理由があり、三奏本にまで残存した。三奏本になると、初度の①の歌を復活させ、その上に、父経信の「九重のみかきが原の小松原千代をばほかのものとやは見る」を新たに補入し、初度②の公長の子の日の歌は二度本からつづいて三奏本にも生かされ、さらに源道済の「姫小松おほかる野辺に子日して千代を心にまかせつるかな」の一首を新しく添加してここに三奏本は「子の日」の歌の全様五首が揃った。しかも、その舞台は宮中、春日

野、引馬野、辺地の種々の姫小松に千代をこ
とほいだ「子の日」の歌となつて表わされた
のである。つまり「若菜」主題の歌は全くな
くなり、俊頼みずからの歌はここにおいても
続類従本に一度顔をみせただけで、結局千載
集という形で勅撰集に残った運命をもつ一首
であった。一月最後の主題は「柳」である。
この歌は一連八首を構成している。
①あさみどりそめてみだれる青柳の糸をば春
の風やとくらん（坂上是則）

コクヨ B4 20×20

②さをひめのいとそめかくる青柳をふきなみだりそ春の山風（平兼盛）

③風吹けば柳の糸のかたよりになびくにつけてすぐる春かな（院御製）

④あさまだきふきくる風にまかすれば かたよりしげり青柳のいと（春宮大夫公実）

⑤風吹けばなみのあやをるりけ水にゝとひきそふるきしのあをやぎ（源雅兼朝臣）

⑥谷川のふきあげにたてる玉柳えだのいとまもみえぬ春かな（よみ人しらず）

⑦もがり舟ほづしめなわ心せよかはぞひや、
なぎきしになみよる　（源俊頼朝臣）

⑧いかなればこほりはとくる山風にあすぼほ
るらん青柳のいと　（源　孝遠）

これら八首をみると、①から⑤までは共通的用語（「そめて」「青柳」「柳の糸」「風」）の上で緊密な関聯を保ちつゝ歌は進展していくことに気づくが、あと三首の歌の質はやや異なる。それは⑥が⑤をうけつぎ水に縁のある「谷川」を引きおこしさらにそれは俊頼

コクヨ　B4　20×20

の「川ぞひやなぎ」の語につながる。ところが⑧になると中断する如くに、「いかなれば永はとくる山風に」とおこし、「山風にたゞるらん青柳のいと」と急変して最後を結着せしめている。いわば初め五首は序破であるが、後三首は急に転化する。

ところが、続類従本に於ては①と②は削っている。これは例の如く三代集歌人であったためであり、⑧を⑦の前に順序を入れ替えて、六首の柳の歌が白河院の歌に始まり、後類

の歌で終るといった形になった。これは意図的に俊頼が統一的構成を以て改修したものとも解される。

この俊頼の⑦の歌は散木奇歌集の一月の最後をかざる柳の歌である。

さて、こうした二度本の配列が、二奏本になると又改修され、②が再生され⑤の次に配列された。そのあとは③④⑤はもとのままであるが⑥⑦⑧の三首を思ひ切って削除した。それに新たに源道済の「ふるさとのみかきの

コクヨ B4 20×20

柳遥々とたがそめかけし浅緑ぞも」の一首を玄々集から採用し最後の位置に配列した。この事は、先にも例のある如く、三奏本が二度本よりも初度本に接近したことを意味する。ここにおいても俊頼の自詠の歌は遂に初度本と続類従本のみに顔をみせた丈で遂に二度本、三奏本には姿を没してしまった。俊頼は勅撰集撰述に当たっては、自詠を自由に取捨選択の対象におき、自詠だからといって決して三奏本にまで残そうとした態度はとっていな

い。大きな勅撰という編集の事業の前には、自詠を強いて入集させるといった如き個人的な感情には少しも左右されていない大らかな襟度をもっていた。この事は俊頼の人柄をも思わせる一つの具体的表れでもあった。

二月に入ってからの主題には「呼子鳥」「山彦」「雁」などあるが、ここには俊頼の歌はない。春の歌の中心は何と言っても「桜」であり、桜の歌は量的にも最も多く、初度本に於ては五十六首の多きに達している。

コクヨ B4 20×20

この桜の歌に於ても、一月の梅の主題と同じ配列法をとり前半に主として「咲く桜」三十五首後半に「散る桜」二十一首が配列されている事である。松田博士は更に前半を五つの歌群後半に三乃至五つの歌群に細分して精密にその構成を実証的にあとづけているのは注意すべきである。これを俊頼にしぼつて考えてみると、初度本に於て彼の梅の歌は

。山ざくら咲きそめしより久方の雲井に見ゆ

るたきのしら糸

の一首であるが、寛治八年八月十九日藤原師実前太政大臣（賀陽院殿）の歌合に「桜をよめる」として「散木奇歌集」（二月）に出ている歌で俊頼40才の時の作にかかる。これは俊頼の代表作とも云われる秀れた歌で二度、三奏本までずつと残つたものである。

俊頼の周辺の歌をみると次の様になつている。

のちりつもる庭をぞ見まし桜花風よりさきに尋ねざりせば（皇后宮摂津）

コクヨ B4 20×20

②山ざくらの歌（後鳥羽）

③初せ山雲井に花の咲きぬればあまのかはなみたつかとぞみる（大蔵卿匡房）

④散るはなのながるゝ水につもらぬもそれさへ雪の心ちこそすれ（藤西上人）

①と②はいずれも「宇治前太政大臣家歌合」によんだものであり、題材の上からは①は満開をすぎた桜の状態、②は咲きそめる桜の美しさのちがいがありその関連は稀薄。この理由から松田博士はこの間に一線を画し区別し

ている。すなわち②はさきそめた桜③は咲き誇っている桜、④は水上の落花という桜花の時間の推移を以て配列した美的景象の統一をはからうとした。ところが、その後俊頼は、桜を主題とする歌が少ないと思ったためか、続類従本に於て②と③の間に

よしの山みねにたなびく白雲と見ゆるは花のこずゑなりけり　（藤原忠隆）

の一首を更に補入させている。こうなると②の「瀧の白糸」新入の「たなびく白雲」③の

コクヨ　B4　20×20

「天の川波」という景物が連接し最後にその花を水に流る雪とみて之を終結させる構成方法が成立するのである。ところが二度本では「よしの山」の歌を③の次に移動させ、④を思いきって除去して、ここに「咲く花」のみの歌に統合させたことは、この週辺構成についてさらに俊頼の苦心したところである。それは又より効果的な流動展開をみせた景観美への集約でもあった。しかし三転して、三奏本になると、俊頼の歌の位置をずっと前に

移動させている。そして他は「よしの山みねになみよる」と「散る花のながるる」の二首は削って匡房の「はつせ山」のみをのこした。これは何に原因するかと考えてみると、残した二首の前には、いずれも玄々集の歌を補入させている。即ち「山ざくら」の前には「春の来ぬところはなきを白河のわたりにのみや花は咲らん」（小式部内侍）を入れ、「はつせ山雲ねに花の」の前には、「この本をすみかとすればおのづから花みる人に成ぬべきか

コクヨ B4 20×20

な一（花山院御製）を入集せしめている。この順序は、一層相互の歌を固く結びつけた編集構成になっていて玄々集から二首入れたことにより生じた新しい展開である。

その次の初度本における俊頼の桜の歌は

。梢には吹くとも見えで桜花かほるぞ風のしるしなりける

であるがこれは後半の「散る桜」を素材としたもので、この周辺の歌をみると次の通り

①春の日ののどけき空に降る雪は風にみだる

、花にざりけり（太宰大弐長実）

②花さそふあらしや峯をわたるらんさくらなみよる谷がはのみづ（源雅兼朝臣）

③けさみればよはのあらしに散りはてて庭こそ花のさかりなりけれ（左兵衛督実能）

の次に位置している。次に

④惜しむともいくかもあらじさくらばなこころのままに折りてかへらん（藤原顕輔朝臣）

この様に並べて前後の歌を見ると本来散る桜をよむべきところに、咲く桜が存している

コクヨ B4 20×20

形である。その意味から統一した配列ではないが一方変化をみせたとも言える。伝しそういった故か続類従本、二度本では共に顕輔の歌を削っている。俊頼は、ここでは自詠を削っていない。三奏本でも全じ。（但し、三奏本でも良経筆本は後程の歌は欠ぐ。）「散る桜」の中に、「咲く桜」の歌が存在していることは編集としては脆弱の様で又不統一ともみられない事はないが、俊頼が自詠を残存せしめた事は、変化を求めた点であるとも解される。

次に、いよ〳〵「散る桜」の中心をなす十二首の歌群が配置されるわけであるが、初度本においては、散る花の俊頼の歌は一首もない。ところが続類従本に於て、俊頼は、自詠の

○身にかへてをしむにとまる花ならば今日や我身の限ならまし

の一首を補入している。

さくらばな雪かゝるまでかきつめて吉野の山と今日は見るかな（御匣殿）

コクヨ B4 20×20

の次に補入した。その代り

おきふしてをしむかひなくうつゝにも夢に

も花の散る世なりけり（凡河内躬恒）

を削除している。躬恒を削り、俊頼自詠を加入させたのは、三代集歌人を削除する意味で（十二首の中の他にも大中臣能宣、源重之を削除）了解出来るし、ここに自詠を持ってきた俊頼の歌の結句「今日やわが身の」とすぐ前の御匣殿の「さくらばな」の結句「今日は、みるかな」とは語句的につながっているので

不都合は感じられないが、内容的にはつづきはよくない。二度本でこれを削除しているのは、そうした配列の上から不安定を考えての上であったと思われる。次に今一首続類従本にはつきり「散る櫻」を主題とした俊頼の歌に「落花の心をよめる」と題して

○山あらしのみねこす風にちる花を空行く浪と思ひけるかな

の一首がある。これにつづいて「散りはてぬ花のありかをしらすればいとひし風ぞ今日は

コクヨ B4 20×20

うれしき」（中納言雅定）と、「水の面にちりみちにける櫻花なにをか池のしるしには見ん」（平忠盛）の二首がつづき都合俊頼の歌と共計三首が、散る桜の最後を飾っている。この三首の密接度は高い。例えばその題詞をみると俊頼のは金葉集には「落花の心をよめる」とあるが、散木奇歌集では「山花隨風」となってをり、次の雅定の題は「残花薫風」次の忠盛のは「水上落花」という変化と転換を試みている点は巧緻な配列であり初度本よ

りずつと統一的均整がとれている。ところが二度本に於ては、俊頼は自詠と忠盛の歌を削つてしまい、雅定の歌のみを残存させた。結局、俊頼の「山あらし」の歌は、続類従本のみに顔を出し、二度、三奏本においては姿を消してしまつた。それは改修の度にみられる三奏本独自の削減に向う自由なそして純度を高める構成手法によつたためであつた。ところが、三奏本になつて俊頼は外に

のおのれかつ散るを雪とや思ふらんみのしろ

コクヨ B4 20×20

ごろも花もきてけり

の自詠を新たに追加している。その個所は、前述(3)「けさみれば」(実能)の次にある。この歌の題詞は「落花満庭」であり、俊頼の歌に顕仲朝臣の八條の邸で詠んだ「花の心」の歌でありこの連接に前歌の「庭こそ雪のさかりなりけれ」に対して「散るをや雪とや思ふらん」の照応があって緊密度はつよい。初度本、続類従本においては、この場所に「木ずゑには吹くとも見えでさくら花かをるぞ風

のしるしなりけり」があり、ここの場所の補入歌についてはかなり俊頼自身いろ〳〵苦心したようであり、結局三奏本においては「おのれがつちるこゝゝ」におちついた。さて、ひるがえって初度本の春の最後をかざる歌として俊頼は「摂政左大臣家」で「三月尽の心」を詠んだ自歌

かへる春うづきのいみにさしこめてしばし（までもみむ）イ
みあれのほどにても見む

を置いている。この歌の周辺をみると、次の

コクヨ B4 20×20

通り。

1 いくかへり今日に我身のあひぬらん惜しむは春のすぐるのみかは（藤原定成朝臣）

2 春の行くみちにきゑかへほととぎすかたらふ声にたちやとまると（大僧都證観）

3 わりなきは今日のみと思ふはるの日の山のはちかくなるにぞありける（源雅光）

4 春はをし人はこよひをたのむれば思ひわづらふ今日のくれかな（内大臣）

5 行く春のすがたに見えぬものなれば引きだ

にえこそとゞめざりけれ（摂政左大臣）

6 花だにも散らで別るる春ならばいとかくけふと惜しまざらまし（中納言朝忠）

7 **俊頼の歌**

8 思ひやれめぐり逢ふべき春だにも立ち別るゝはかなしき物を（藤原顕輔朝臣）

この8首の歌は朝忠を除きみな金葉集歌人でその流れも「三月尽」の歌としてはいずれもふさわしい編集ぶりであり、俊頼のこの歌は散木奇歌集に於てもまた一春部の最後におかれ

コクヨ B4 20×20

た歌である。

春の歌の最後をしめくくる意味で「三月尽」の主題の設けられることは八代集以来の一つの型である。逝く春への哀感をこめた詠嘆的心情を表現するのがその中心で、はっきりした自然景象をうたったものでないのが共通した主題である。ところが続類従本になると①、③、⑤、⑥の四首を思ひきって削除して新たに中納言雅定の「のこりなく暮行春をおしむとて心をさへもつくしつるかな」の一

首を補入し、俊頼の歌はそのまま生かしている。経元本では更に歌の排列の順序をかへ第一首目に證観の歌をおき次に雅定の歌を二首目に、内大臣の歌は第三首目という様に順を逆にし、顕輔と俊頼の歌も又逆に配置させた。そのせいか雅春本は、第三首目の作者名「内大臣」をおとし、雅定の歌のようになっているのは雅春本の誤謬である。これが三奏本にはどうなっているかとみると、初度本の「花だにも」（朝臣）の歌を復活させ、類従本

コクヨ B4 20×20

、二度本までつづいてきた。顕輔の「思ひやれめぐりあふべき」の歌を削除し、春の最後を飾る歌は俊頼の「かへる春卯月の忌に」を以て打止めとした。初度本八首、雅定の一首を加えての続類従本の九首の中から三首を削除して、結局六首におさまったのが三奏本の「三月尽」の歌となったのである。そしてこの六首の配列をみると「春のくる路に来迎へ」（證観）の一首と最後の俊頼の「帰る春う月のいみに」など反対の語句用法の面も却つ

て面白く妙味があり、またその間の歌の用語にも緊密性を有し流動配列の構成的手法とみる事が出来る。

以上俊頼の歌を中心にその周辺の編集構成が、初度本から続類従本、二度本、三度本に至るまで、いかに増減移動していったをみてきた。今は俊頼の歌の周囲のみについて見て来たのであるがこれは只、春の歌ばかりでもなく、十巻全般に亘る問題でもあり、俊頼の歌度に亘る金葉集編集にたいする意識の底流を

を知り得るのである。次に俊頼の春の歌について初度より三奏本に至る異同を表示するが以上の事から結論としていえる事は、春の歌において顔を出した歌は凡て十四首であったが初度本から三奏本に至る間或は現れ或は消えたりして左の表によってわかる通り歌の重複もあるが歌数の上からは七首（初）11首（続）4首（二度本）4首（三奏本）という漸減を示してその間棄てられずに残存した歌は、「山ざくら」「かへる春」の二首だけで、次は

「春雨は」「木ずゑには」二首が四度、次は二度の「藻がり舟」と「身にかへて」の二首であるが、結局三奏本に生かされたのは「身にかへて」の歌であった。その他は夫々一度どこかで顔を出したのみ。この中類度数がただ一回の歌で初度本のみに一度顔を出しただけの歌が二首、続類従本の四首は漸減方針にかなっているが、初度本以降全く現われずに三奏本になって始めて新しく補入されて残った「おのれかつ」の一首は注意すべきである。

金葉集における俊頼入集歌の異同一覧表

春の部（十四首）（注・○印は入集、×印は削除）

		初度本	続類従本	二度本	三奏本	頻度数
1	○いつしかとけさは氷もとけにけり いかでみぎはに春を知るらん	○	×	×	×	1回
2	○波たてる松のしづ枝をくもでにて かすみ流れる天の橋立	○	×	×	×	1回
3	○庭もせに引きつらなれるもろ人の 立ちぬる今日や千代の初春	×	○	×	×	1回
4	○春雨はふりしむれども鶯の声はし ほれぬものにぞありける	○	○	○	×	3回
5	○藻かり舟ほつゝしめなわ心せよ 川ぞひ柳岸になみよる	○	○	×	×	2回
6	○木ずゑには吹くとも見えでさくら花 かをるぞ風のしるしなりける	○	○	○	×	3回
7	○かへる春うづきのいみにさしこめて しばしみあれのほどにても見む	○	○	○	○	全
8	○山ざくら咲きそめしより久方の 雲井に見ゆるたきのしら糸	○	○	○	○	全
9	○いつしかと末の松山かすみあひて 風とともにや春はこゆらん	×	○	×	×	1回
10	○散る花は水の岩間によどむとも 香は流れてやせにとまるらん	×	○	×	×	1回
11	○春日野の雪とわかなに摘みそへて 今日さへ袖のしほれぬるかな	×	○	×	×	1回
12	○身にかへておしむにとまる花ならば 今日や我身の限ならまし	×	○	×	○	2回
13	○山あらしのみねこす風に散る花を 空ゆく浪と思ひけるかな	×	○	×	×	1回
14	○おのれかつ散るを雪とや思ふらん みのしろ衣花も着てけり	×	×	×	○	1回
計		7	11	4	4	26回

以上のことを表示すれば次の如くになる。

(二) 夏の部

次に俊頼の歌を中心に夏の部を考えてみたい。夏部は季別には四月、五月、六月がこれに配される。この中四月は「夏のはじめ」、五月は「中夏」、六月は「はての夏」という季節の移りに応じて種々の主題がその下部に配置される。

初度本の夏の歌は91首。(実数は92首)

春の歌が立春に始まるのに対し夏の歌はまず

更衣のすがすがしい歌から始まる。後鳥の夏の歌は初度本では六首でこの中始めて出てくる歌は、四月の主題「ほととぎす」を詠んだ次の歌である。

(1) 待ちかねてたづねざりせば郭公たれとかやまのかひになかまし

(2) ほととぎす待つ夜のかずはかさなれど声はつもらぬものにざりける

ほととぎすの歌は初度本に於ては三十四首の多きに達し、全夏歌の三分の一の比率を示

している。俊頼の歌がこの中から二首というのは初度本としては必ずしも多い方ではないが、続類従本では新たに三首、三奏本で一首、計六首が一応は補入されている。この点からみると三奏本まで夏の歌全部で俊頼の作は十五首であり、たとい途中で削られた歌はあったにしてもほぼ「ほととぎす」の歌六首という数は最高である。

さて、この二首ともに「ほととぎす」を待つ心境の歌で、いずれも散木奇歌集では五

月に配置されている。(1)は、金葉集に於ては「ほととぎすをよめる」の題詞のもとに、僧正永縁の「聞くたびにめづらしければ郭公いつも初音の心ちこそすれ」の次に並べられ、次の「稲荷山たづねや見ましほととぎす待つにしるしのなきかとおもへば」(大中臣公実とあるが是は誤りで中納言実行が正しい)の歌につながる。「散木集」によればこの題詞はもっとくわしく「八條入道の泉の家にまかりて十首歌人々よみけるに」とあり、(2)の歌も散

コクヨ B4 20×20

木集によると修理大夫の六條の家でよんだ「連夜待郭公」の歌ということが知られる。然も(2)の歌はその構成からみると前半「ほととぎすを待つ心」の25首中の最後に位置している。すぐその前には

(a) 宿ちかくしばしかたらへほととぎす待つ夜のかずの積るしるしに（前斎院院六條）

(b) ほととぎす稀に聞く夜は山彦の答ふるさへぞうれしかりける（中納言雅定）

の二首あり、俊頼の歌は(a)の「待つよのかず

の積るしるしに」の語句と連接し、(ム)の「梯に聞く夜は」とも心情的につながって緊密性をもっている。これが続類従本ではどうなっているかといえば、(1)の歌の周辺は全く同じであるが次の(2)の前歌には「玉さかにとふひのもりの梢よりなのりてすぐる時鳥かな」（源忠峯）の一首が添加されているのが初度本と異る。これは続類従本の初度本より歌を増す方針をとったためであり、この忠峯の一首はむしろその前の(ム)につながる歌で、(2)の俊

頼の歌との接続は稀薄である。二度本に、俊頼がこの自詠を削除している理由はここにあると思われる。

続類従本の特色としては初度本に全くなかった俊頼自詠の「ほととぎす」の歌を三首も増加させていることである。その三首は次の通り。

(3) ほととぎす声待つけて聞ほどや人に我身のうらやまるらん

(4) またすてふ我名はたてじ時鳥なきをこしつ

と人にかたるな

(5) なきつとも誰にかいはん時鳥かげより外に人しなければ

これらは、いずれも「ほととぎす」の初音を素材にした歌であった。しかし、この三首は二度本・三奏本ではすべて思ひ切って削除された。その代りに三奏本では、

(6) 「音せぬは待つ人からか郭公たれ教へけん数ならぬ身を」の一首を新たに添加した。

三奏本では、その他の俊頼の「ほととぎす」

コクヨ B4 20×20

の歌は全部削って結局、この一首のみを残存させたのである。

次の俊頼の歌には

(7) さみだれはふるからおのの忘れ水おしひたすらの沼とこそみれ

(みる)イ

の一首がある。これは金葉集における「五月雨」の主題歌九首ほどある中の一首であるが、続類従本になるとこの歌は削除され

(8) さみだれは軒のしづくのつくづくとふりつむ物は日数なりけり

の一首が入れ代っている。これはさみだれそのものと詠じたのではなく、さみだれを借りて日数のふりつむことへの心境歌になっている。藤原定通の「さみだれは日かずへにけりあづまやのかやが軒ばの下くつるまで」へ初度、続類従本ともあり一につながるものとしてこうした心境歌を補入したのではあるまいか。接続もこちらの方が緊密でもある。しかし二度本では歌の漸減整理のため削除してしまった。三奏本では更にしぼり「五月雨」の

歌は四首になり、俊頼の五月雨の歌は一首もとどめぬことになってしまった。

次は主題「夏風」で、初奏本には「水風暁涼」と題して

(9) 風吹けばはすのうきばに玉越えて涼しくなりぬひぐらしの声

の一首がある。これは顕季の

夏ごろもすそのゝ草の吹く風におもひもあえず鹿やなくらん

に続いている。続きすも「すそのゝ草の吹く

風」をうけて「風吹けばはすのうきばに」と
なだらかに連接させた編集方針は巧緻である。
続類従本二度本においてもこの歌は生かされ、
前後関係も全く初度本に同じ。なお、風吹け
ばの歌は「散木・奇歌集」では皇后宮権大夫師
時の八條の家で「水風暁涼」と題して作った
歌で「六月」の巻頭におかれ、俊頼の名歌の
一首である。

次は「夕立」の主題で

(10)
この里も夕立ちしけり浅茅生につゆのすが

らぬ草の葉もなし

の歌である。夕立の主題歌はこれが唯一首。続類従本にも採用しているがここでは初句「この里に」とあり散木集では「この里も」でありこちらの方がこの歌を生かし得ていて正しい様に思ふ。

夏の部で初度本から三奏本まですべて採用しているのは、この歌一首のみで俊頼の代表歌の中に入れられる自然詠とみる事が出来る。

最後は「月」の主題であり、

(11)山のはを玉江の水にうつしもて月をも波の
下に待つかな

の一首がある。この作者を初度本で「中納言
顕隆」としているのは俊頼の誤である。とこ
ろが二度本、三度本ではこの歌は削除された。
漸減の方針にもとづくためである。ここでは
歌を削るということは「夕立」の主題そのも
のが削除されたことを意味する。

以上夏の歌における俊頼の作品十一首を中
心に考えてみたのであるが、結局初度に於て

6首、続類従本に於ては初度本から一首削り更に新しく4首を加え9首に、二度本では初度本の六首のうち3首をけずり三首におちつき三奏本で、ぐっとしぼり主題「夕立」の「この里も」をのこし、これまでの主題「ほとときす」の歌は全部削って三奏本に新たに補入した「音せぬは」の二首におちついた。

以上のことを表示すれば次の如くになる。

	夏の部（十一首）	初度本	続類従本	二度本	三奏本	頻度数
1	待ちかねて（わび）たづねざりせば郭公 誰とか山のかひに鳴かまし（三度・続類）	○	○	○	×	3
2	ほととぎす待の夜のかずはかさなれど 声はつもらぬものにざりける（そありける）続類	○	○	×	×	2
3	ほととぎす声待ちつけて聞くほどや 人にわが身のうらやまるらん	×	○	×	×	1
4	またすてふ我名はたてじ時鳥 なきおこしつと人にかたるな	×	○	×	×	1
5	なきつとも誰にかいはんほととぎす かげより外に人しなければ	×	○	×	×	1
6	音せぬは待つ人からか郭公 誰教へけん数ならぬ身と	×	×	×	○	1
7	さみだれは軒のしづくにつくづくと ふりつむものは日数なりけり	×	○	×	×	1
8	さみだれは降るからおのづと忘れ水 おしひたすらの沼とこそ見れ	○	×	×	×	1
9	風吹けばはすのうきばに玉越えて（すへて）続類 涼しくなりぬひぐらしの声	○	○	○	×	3
10	この里も夕立ちしけり浅茅生に（や）続類 露のすがらぬ草の葉もなし（ぞなき）続類	○	○	○	○	4
11	山のはを玉江の水にうつしもて 月をも波の下に待つかな（に）続類（初度本「中納言顕隆」と誤写）	○	○	×	×	2
計		6	9	3	2	20回

(三) 秋の部

初度本金葉集巻第三秋の部は147首と記しているが実数は148首(一首多い。)秋の月別は七月(はつ秋)八月(なかの秋)九月(はての秋)と配置されその下に夫々の主題が配列されている。春部の主題が立春で始まる如く、秋部は立秋でその主題がまず始まる。秋の主題として最も多いのは、初度本に於て月の歌62首、次に紅葉の18首それについで七夕の15首

という順になるのであるが、俊頼の歌の位相を考えてみると極めて複雑な過程をたどる。

まず、俊頼自身採用した自歌が十首あるのでその周辺を中心に考えてゆきたい。

まず、最初に問題となるのは二度本になって始めて七夕の歌に俊頼の左の

。かへるさはあさ瀬もしらじ天の川あかぬなみだに水しまさらば

の一首が補入されていることである。これは三奏本になって削除の運命にあった歌で、「

伝為遠筆本」（吉田幸一博士　）をみると、「天の河かへさの舟に波かけよ乗りわづらはばほども経ばかり」（内大臣家越後）の次に片仮名一行書きで小書きしている。本書では削除された歌は、概ね順に従ってすべて片仮名書きでふさく詞書、歌、作者を必ず書き込みをしている。この字は本文同筆の為遠筆と推測される。しかるに「カヘルサハアサセモアランアマノカハアカヌナミタニミツシマサラハ」の歌は、唯、歌のみで題詞も作者名も

逸している。これは為遠もこの歌の作者を俊頼と断定しかねた結果であり、散木集にもない所からみれば、俊頼の歌とみない方が正しい。二度本が何を根拠に俊頼としたか全く理解に苦しむ。これは俊頼の歌と見るべきではない。

(一)月の歌

(イ)、初度本において、俊頼はまず自詠四首を採用し、その中月の歌が二首あり、今、その一首の俊頼の歌の周辺をみると次の通り。

コクヨ B4 20×20

対月厭雲といへる事をよめる

(a) さやかなる月をかくせる雲なれば心なき名も立つにやあるらん（源明賢朝臣）

（注、続類従本では明実とあり）

八月十五夜の月の心をよめる

(b) いつとなくおなじ空ゆく月なれどこよひをはれと思ふなるべし（藤原為忠）

九月十三夜、閑見月といへるをよめる

(1) 澄みのぼる心や空に拂ふらん雲のちりゐる秋の夜の月

住吉にまかりて、かへさに長柄のわたるにとまりて、

旅宿月といふ心をよめる

(c) たびねするなにはの浦の苫やかたもろ心にも宿る月かな（藤原有業）

以上四首についてみるに、同じ月でも、八月と九月の月とがあり、初度本に於ては後頼は「九月十三夜」の月の歌をまず詠んでいる。この詞書は金葉集では極めて簡単であるが、散木奇歌集をみると非常な長文で「小序」まで附してこの作品形成の場を委細に説明している。（散木奇歌集に於ても最長文）そして

コクヨ B4 20×20

本歌のあとに一首へいくとせにきさで人のなりぬらんと思へばいなやきのふばかりかゝの恋歌と一首併置させているのも特殊な形である。「九月十三夜於前武衛泉亭詠関見月副隔一夜恋和歌拝」という題詞のあるのがそれでそのあとに長文の「小序」がつづくのであるが、場所は「西の宮のうち月のかつらのひんがしいくらもさらざる程にさもやさしきすみかあり」というところであり、「わきかへるいづみの水もきよくたてたるいはもかとあ

るさまに見ゆ」といふ背景をもつている。白河法皇新造の室町西殿に遷った大治元年（九才）の時であろう。「ここにやまとことばにたへなるともがら薄のおばなにまねかれよぶこ鳥の声につきてそのかずあつまり給へころなり。」（ママ（る脱カ））けふなりたゝにてやはあかし給はんとてしづかに月をみるといふことに恋の心をそへておのゝたてまつり給ふ」という状態においてであった。さらに、今一つ注意すべきは、まだ白河院に仕えていた殿上人であった

昔をしのび「としよりはつかさくらゐひきく
面のしはゝたかし。かしらのかみはうつろひ
ゆけども心はかはらざりけるものなれば見る
もの聞事につけてあくがれうせぬるにや……」
と今も老いてはいるが歌によする心は少しも
昔と変らぬ心境を吐露し、九月十三日の月を
しづかに賞したその夜の心も月と同じくすみ
切っているすがしい歌になっている。この歌
が、「山のはに」「うづらなく」の歌と共に
三奏本にまで残しえたのは俊頼的な清澄な調

ママ（ひくきカ）

べをもっていたがためである。その接続も(a)
から(b)とつづき、それをうけて(1)の澄み切った
月の点出は一応効果的である。この三首の
順序は続類従本に於ても全く同じであるが(c)
の「たびねする」が「月を見て思ふ心のまゝ
ならば行衛もしらずあくがれなまし（皇后宮
肥後）」と入れかわっている。二度本では、俊
頼の歌はもと通り採っているが(a)・(b)を削除し
○秋はなほのこりおほかる年なれどこよひの
月の名こそおしけれ（春宮大夫公実）

コクヨ B4 20×20

○雲の波かゝらぬさよの月かげをきよたき川にうつしてぞ見る（前斎院六條）

の二首を入れかえている。この二度本を、続類従本と比較してみると語句の上でずっと安定してつづく。即ち

「こよひの月の名こそおしけれ」↓「雲の波かゝらぬさよの月かげを」↓「雲の塵ゐぬ秋の夜の月」と流動してゆく形をとってくるのである。

三奏本では俊頼の(1)「すみのぼる」の歌は、

順序をずっと後方に廻して思いきって編集の方法をたて直していることが特色であり、一見孤立した所に置かれているように見えるが、語句の上からはすぐ前の「さらぬだに玉にまがひて置く露をいとど磨ける秋の夜の月」とつづきをもたせたことは注意してよい改修ぶりであった。

(ロ)、俊頼の二首目の月の歌の周辺をみると、

宇治前太政大臣家歌合に、月を読る

(ニ) 山のはに雲の衣をぬぎすてゝひとりも月の

立ちのぼるかな

というつ高陽院水閣七番歌合し出詠の月の歌につづいて

(d) 葦根はひかつみも繁き沼水にわりなくやどる夜半の月かな（摂政左大臣）

(e) かづみ山峯より出づる月なればくもる夜もなくかげをこそ見れ（一宮紀伊）

（き）三奏本・二度本

の二首が配置された。これは続類従本に於ては丁度八首欠脱の個所に当たるが、宣秀本により補うことが出来る。その順序は全く同じ

で二度本、三奏本ともに異動はない。この連接は

(2)「ひとりも月の立ちのぼるかな」↓(d)「わりなくやどる夜半の月かな」↓(e)「くもる夜もなくかげをこそみれ」と内容的にも照り澄んだ月をよみ語句的にもよく連結しているところから俊頼は、初度本から三奏本に至るまでそのままの順序に配置したのであろう。

(キ)イ

(ハ) 続類従本になって補入された月の歌

顕季卿家にて九月十三夜、月のうたよみけるによめる

(3) むら雲や月のくまをばのごふらむ晴ゆくまに照まさるかな　(の)イ　(むら)イ

俊頼のこの一首は、初度本では採られていなかったのに続類従本になって始めて補入されたのである。この歌は同じ顕季家でよんだ

(ち) くまもなき鏡とみゆる月影に心うつらぬ人はあらじな　(へ)　太宰大貳長実一

につづいて配置している。初度本ではこの長実の歌も採用していない。類従本に於てはこの二首は

(ほ)あき山のし水は汲まじにごりなば宿れる月のくもりもぞする（藤原忠兼）

の歌と

(ん)ひるとのみいはれの野べの月かげは露ばかりこそよると見えけれ（源　定信）

との間に挿入する如くに配置された。しかし(ほ)・(ん)二首とも二度本には削除されたが、(ほ)俊頼の歌と(ん)はそのまま不動の位置を保ち三奏本まで残った。次に、月の歌がもう一首ある。

月前落葉を

(4) あらしをやはもりの神もたゝるらん月に紅葉の手向しつれば

この歌は、続類従本における月主題の最後の歌であり、初度本の最後の歌「露むすぶ草の枕に夜もすがらひとり有りあけの月を見るかな」（源国房）の一首を削除してこれを補入した。俊頼としては、この歌により月の最後をしめくくろうとしたのであろう。題詞「月前落葉」というのがよくそれを示している。

しかし三奏本では、またこれを削除した。この歌そのものはやゝ理屈におちていて俊頼の歌としてはさしてすぐれた歌ではない。続類従本と二度本に顔を出しただけで終ったのも編集上残すべき必然性も稀薄な歌であったためであろうと思われる。

(二) 三奏本になって補入された月の歌

俊頼が、三奏本になって初めて入集させた自詠歌は

(5) 木枯の雲吹きはらふ高嶺よりさえても月の

澄み登るかな

の一首である。これは「堀河院初度百首」の時の作で千載集にも入集している歌

「木枯の」の歌の周辺をみると、初度本以来三奏本まで残なした次の

(え)さやけさは思ひなしかと月影を今宵と知らぬ人に問はばや（源親房）

(う)秋はなほ残おほかる年なれど今宵の月の名こそをしけれ（公実）

の二首の間に補入されている。三奏本は漸減

の撰歌方針をとっているにもかかわらず(4)木枯の」を追加した事は、俊頼としてはよほどこの自詠に自信のあったためであろう。同時に「堀河初度百首」において詠んだという歌壇的意味をも考えたのかも知れぬ。(5)の歌をうけて俊頼の「さえても月の澄み登るかな」の接続は効果的でもあり、ここに補入させた改修意識は十分理由あることであった。そして初度本以来持用しなかった宮中の月を二首「九重のうちさへ照らす月影に」へ大江為政

）と「こころみにほかの月をも見てしがな」（花山院御製）を新たに補入させ、初度本以来別な方法で月の主題歌を編集し直したのが三奏本の特色であったことが知られる。また、三奏本の俊頼の月の位置そのものも初度本以来かなり配置を変更させている点からもこの事は容易に考えられるところである。即ち三奏本では俊頼の歌としてまず先に配置したのが「木枯の」の歌であった。初度本以来の歌の順位は㋑すみのぼる㋺「山のはに」であ

「たが、三奏本では新補入歌「木枯の」がのでは②が「山のはに」で「すみのぼる」は③になっている如く、その間の歌の配列順序にかなりの移動のあることも三奏本の新しい改修方法の特色という事が出来る。

(二) 鹿の歌

次に俊頼の歌の主題に「鹿」がある。

野亭鳴鹿といふ事をよめる

○さを鹿の鳴くねは野べに聞ゆれど涙は床のものにぞありける

の一首であり初度本の鹿の歌全部八首を示すと次の通り。

鹿をよめる

(1) 妻恋ふる鹿ぞ鳴くなるひとり寝のとこの山風身にやしむらん（三宮　大進）（朝）続類従本

(2) 秋ごとに声もかはらず鳴く鹿はおなじつまをや恋ひわたるらん（藤原重孝）（続類従本では藤原季孝）

暁鳴鹿といへる事をよめる

(3) おもふ事有あけがたの月かげにあはれをそふるさを鹿のこゑ（皇后宮　右衛門佐）

田家鹿をよめる

(4) 山田もるしづのいほりのあたりには鹿より
ほかに来る人もなし（藤原宗国）

旅宿鹿といへる事をよめる

(5) さもこそはみやこ恋しき旅ならぬ鹿のねに
さへぬるる袖かな（源　雅光）

野亭鳴鹿といふ事をよめる

◎

(6) さを鹿の鳴くねは野べに聞ゆれど涙はとこ
のものにぞありける（源俊頼朝臣）

コクヨ　B4　20×20

鹿歌とてよめる

(7) 世中に秋はてぬとやさをしかのいまはあらしの山になくらん（藤原顕仲朝臣）

(8) 秋ならでつまよぶ鹿をきてしかなをりからこえは身にはしむかと（藤原行家朝臣）

以上をみるとこれらの歌は題詞にみる如く暁の鹿とか、田家の鹿、旅宿鹿、野亭の鹿などの雑多な鹿を素材として取りあげていることが知られる。ところが、続類従本になると、歌に異動がおこる。まず(6)俊頼の歌を削除。

（を）続類従本

(3)の次に新しく「夜半になく声に心ぞあくがるゝ我身は鹿の妻ならねども」（越後）を、また(1)と(8)の間に「白露と人はいへども野辺みればおく花毎に色ぞかはれる」（肥後）を補入した。この「白露と」の歌を「野草帯露」のもとに補入し(8)が初度本では「鹿歌」であったのに、「白露と」と同じ題の下に統合されたのは、かなり無理な編集である。そのため、後頼の一首は削ったが、結局鹿でない歌まで追加された九首という結果になった。そ

れが二度本になると、(2)、(4)を削除して「白露とし」の歌を(8)の次に転位させ鹿の歌から除外した。これで鹿の歌としては、すっきりとなったわけである。

三奏本になると、全く新しい

鹿をよめる

高砂の尾上にたてる鹿の音にことのほかにも濡るゝ袖かな（恵慶法師）

旅宿鹿といへることをよめる

秋萩を草の枕にむすぶ夜は近くも鹿の声をきくかな（藤原伊家）

の二首を補入した。これなどは題詞を初度本

に近づけた編集方法であるが、ただ題詞を初度本に復帰させただけでは発展はないが、歌を新たに入れかえた所に三奏本の特色が出てきたということになるのである。そして、初度本に採用していた「さを鹿」の自詠を再び復活させ、ここに再び歌数を初度本の八首に帰したことは漸減の手法をとる三奏本に、俊頼がいかに「鹿」の主題に腐心したかを物語るものである。因みにこの歌は千載集にも入集している。

コクヨ B4 20×20

(三)「すすき」の歌

次の主題は「すすき」で初度本には次の四首が入集している。

野草留人といへる心をよめる

(も)続類従本

㊀ゆく人を招くか野べの花すすきこよひもここに旅寝せよとや（平忠盛朝臣）

㊁しほ風になみよる浦の花すゝきしづくを拂ふ袖かとぞみる（神祇伯顕仲）

㊂いまはしも穂に出でぬらんあづまぢの岩田の小野の篠のをすゝき（藤原伊家）

堀川院御時、御前にてすゝきをとりてつかうまつれる

④うづら鳴く真野の入江のはま風に尾花なみよる秋のゆふぐれ（源俊頼朝臣）

俊頼の④の歌は彼の代表歌としてすぐれた歌であり、俊頼自身もこの歌については三奏本に至るまで削除せずに残した作品である。しかし前の三首については種々考えていたようで続類従本では②、③は削除した。ところが二度本では再考しなおして、③を復活させた。しかし、そのままでは題詞が削除した②

コクヨ B4 20×20

とつづいていたため、別に「思野花」といへる事をよめる」と改題し、のの前に移動させる方法をとり、ここに「思野草」と「野草留人」というように接続させたのである。これは初度本よりすぐれた方法であったが二度精撰本ではこの歌は削られ三奏本では思いきって全部削り自詠一首のみを「すゝきの題」として残した結果におちついたのである。

(四)「ふぢばかま」の歌

次の主題としては「ふぢばかま」の歌があ

る。これは初度本に三首あり、数も少なく俊頼の作はない。続類従本になって始めて

○ささがにの糸にかかれる蘭たれをぬしとて人のかるらん

の自詠を添加して四首にした。（前三首には異同なし）ところで、初度本の三首目の歌は

○ささがにの糸のとぢめやあだならん綻びわたるふぢばかまかな（神祇伯顕仲）

であり、添加した俊頼の作品とは初句の語句が類似している。こうした点から二度本に於

ては自詠を削除したのであろう。三奏本に於ても全く、二度本の三首をそのまま継承した。大体、三奏本は初度本に復帰する方法をとっているからもとく初度本になかった自歌を新たに補入する必要もないし、初度本の自詠「ささがにの」を生かす余地がなくなってしまった。かくしてこの俊頼の歌は続類従本のみに姿をみせただけで削除されるはかない運命の歌であった。

(五)「紅葉」の歌

次の主題は「紅葉」である。初度本においては18首の多くに達した秋部の歌であるが、続類従本に於ては十二首に減じ更に新たに俊頼の歌一首を補入して十三首に整理している。続類従本になつて始めて入集せしめたのは

太皇太后宮扇合に人にかはりて紅葉をよめる

○音羽山紅葉散るらし逢坂の関の小川に錦おりかく

の一首である。削る方向の続類従本に新たに

コクヨ B4 20×20

俊頼自詠の歌を補入した事は、これが「太皇太后宮扇合」という公儀の歌合出詠の歌であり その素材も「音羽山」「逢坂の関の小川」など削った歌の素材、水、山が一首の中によみこまれているといった考えからではなかったかと思われる。二度本では、そのため、「いくらとも見えぬもみぢの錦かなたれ二村の山と言ふらん」へ橘能光一（元イ）という武蔵国二村山をよんだ山に関する歌を削除し、「谷川にしがらみかけよ立田姫峯のもみぢにあらしふ

くなり」（藤原伊家）（初度本では仲家）と
いう「水辺落葉」を復活させて全歌数には変
化がなく、俊頼の歌はそのまま生きて三奏本
に継承された。三奏本では「紅葉」の歌は全
部で十三首で歌数においては、二度本と同じ
であるが、新たに二首「関越ゆる人に問はば
やみちのくのあだちのまゆみ紅葉しにきや」
（堀河右大臣）、「山里の秋のけしきも見ぬ
人に来てだにかたれ露もおとさず」（前皇后
宮美作）及び玄々集から二首「湖に秋の山辺

コクヨ B4 20×20

を映しは機張ひろき錦とや見ん」（権大僧都観教）「いづくにか駒をとゞめん紅葉ばの色なるものは心なりけり」（藤原長能）を入集せしめ、初度本から復活せしめた歌が三首、他の六首は続類従本二度本にある歌をそのまま残している。唯、三奏本においては歌の順序に多少変化をもたせている。ことに俊頼の「音羽山」の歌は、紅葉の歌をしめくくる意味で最後においていることは、三奏本の特色といえる。以上のことから俊頼はこの紅葉の

主題歌については種々改修上に苦心をつづけて三奏本におちついたのである。

(六)「九月尽」の歌

秋部最後の主題は「九月尽」である。続類従本をみると、「九月尽」の歌は次の三首から構成されている。

(1) あすよりは四方の山べに秋霧の面影にのみたゝむとすらむ（中原　経則）

(2) おしめども野べの草木のかれぬれば露だに

秋はとまらざりけり　（源　涼　国）

(3) 草の葉にはかなくきゆる露じもをかたみにきて秋の行らん　（源　師俊朝臣）

この三首は、秋部の最後尾に位置して配列されている。しかも「草の葉に」の作者をここでは源師俊としているが、これは俊頼の誤りで、「散木奇歌集」第五の九月にこの歌は「九月尽」の題詞のもとに明らかに一首出ている。（但し続類本は「露じもを」とあるが散木集では「露をしも」とある。さてこの作者を

師俊と誤った原因は、初奏本にある。初度本の「九月尽」の一連の作品をみると

(1) あすよりはよもの山べの秋霧のおもかげにのみ立たんとすらん（中原　経則）

(2) いづ方に秋の行くらんわが宿に今宵ばかりはあま宿りせよ（大納言経信）

(3) 惜しめども野べの草木の枯れぬれば露だに秋はとまらざりけり（源　涼国）

(4) 草の葉にはかなく消ゆる露をしもかたみに置きて秋の行くらん（源師俊朝臣）（他筆）

コクヨ　B4　20×20

(5)惜しめどもよものもみぢば散りはてて戸無瀬ぞ秋のとまりなりける（他筆）（重複）

（春宮大夫公実）

の五首がこの順に並べられている。ところで、この中(3)までは為相の同為であるが八十七丁裏（静嘉堂本）(4)、(5)は明らかに他筆であとからの書き込みであり、誰がこれを書き込んだか不明だが（他にも書込みの個所あり）(4)の作者名を「源師俊朝臣」としてしかも(5)の歌は重複しているといふ如き不用意な誤りを

犯している。そこで他筆である(4)の歌は初度本の始めからあったということは出来ない。従って俊頼の歌は続類従本に於て始めて入集とみる方が正しい。源師俊朝臣となっているが続類従本では(2)と(5)を削除して三首にした。二度本では(3)を削り(5)は生かした代りに重複なきよう前の方にある歌を削って三首にした。そして(4)の作者が二度本になって始めて正しい「源俊頼朝臣」の名になっている。

(但し「草の葉に」の歌は二度本の中でも慈

鎮本のみには欠げている）

これが三奏本になると(1)(4)(2)の順にして初奏本の(2)を復活させて三首にした。但し(4)の作者は、そのまま「源師俊」となお誤記している。しかし「いづ方」の作者が初奏本では「大納言経信」となっているがこれは誤りで三奏本では大納言公任となっている。こちらの方が正しい。（この歌公任卿集へ群書類従本）にあり。但し下句は「こよひばかりは雨やどりせで」となっている。）この様にして、

俊頼の歌「草の葉」は初奏本では他筆の形式でその後の諸本には全部残存する事になつた。

以上のことを表示すれば次の如くになる。

コクヨ B4 20×20

秋の部（十首）

	初度本	続類従本	二度本	三奏本	頻度数
1 ○澄みのぼる心や空に拂ふらん 雲のちりぬぬ秋の夜の月	○	○	○	○	4
2 ○山のはに雲の衣をぬぎすてゝ ひとりも月の立ちのぼるかな	○	○	○	○	4
3 ○あらしをやはもりの神もたゝるらん 月に紅葉の手向しつれば	×	○	○	×	2
4 ○むら雲や月のくまをばのごふらむ 晴れゆくまゝに照りまさるかな	×	○	○	○	3
5 ○木枯の雲吹きはらふ高嶺より さえても月の澄みのぼるかな	×	×	×	○	1
6 ○さを鹿の鳴くねは野べに聞ゆれど 涙は床のものにぞありける（ざりけり）（三奏本）	○	×	×	○	2
7 ○うづらなく真野の入江のはま風に 尾花なみよる秋のゆふぐれ	○	○	○	○	4
8 ○ささがにの糸にかゝれるふぢばかま 誰をぬしとて人のかるらん	×	○	×	×	1
9 ○音羽山紅葉散るらし逢坂の 関の小川に錦おりかく	×	○	○	○	3
10 ○草の葉にはかなくきゆる露しもを かたみにおきて秋の行くらん	×（他筆）	○	○	○	3
計	4	8	7	8	27回

(四) 冬の部

冬部も例の如く10月（冬のはじめ）11月（なかの冬）12月（はての冬）の三季に分け、その下にそれぐの主題を設けて配列させている。

冬部の歌数は少なく初度本では60首と記し

ている。実数も他筆を除けばこれと同じ、続類従本も60首。三奏本では54首と記しているが実数は52首である。

さてこの中から俊頼の冬の歌は、初度本から三奏本に至る間は五首採用されているが、初度本では3首、続類従本では5首で一番多く採用し、二度本では三首、三奏本では三首減じて二首という最少の数を示している。以下、俊頼の歌を中心に、その周辺の歌と比較しながら考えてゆきたい。

(一)　紅葉の歌

まず、初度本に於て俊頼の詠んだ主題は紅葉の歌であった。それは左の、

(1)　たつた河しがらみかけて神なびのみむろの山のもみぢをぞ見る

の一首であるが、初度本において作者俊頼の名を逸しているのは初度本の不備な点であった。そのため、注意しないと、すぐ前の源重之の歌が二首続いているようによんでしまう。この歌は散木奇歌集には「百首歌中に紅葉を

コクヨ　B4　20×20

よめる」とあり、十月の紅葉のグループの所に配されている。金葉集冬の部の歌は、歌数の少ないにもかかわらず主題が多いため歌の配列は孤立的で連続性に乏しいのが特色である。そうした関係から続類従本にもこの歌は、採用されているが前後の歌は初度本とはちがっている。ところが二度本と比較すると、俊頼の歌の前が法印光清の「鹿の歌」「なに事を秋はてながら」で後は綱代をよんだ「ひをのよる川瀬にみゆる」（皇后宮肥後）、「つづいて

「月照ニ網代」の「月清くせせの網代に」（大納言経信）「旅宿冬夜」の「たびねするよ床さへつつ」（経信）、「関路千鳥」の「あはぢ島かよふ千鳥の」（源兼昌）「千鳥」の「風早みへ」（さむみ（続））二度本）

（み）二度本

仲）はそのまま同じく連続している。三奏本になると、神祇伯顕仲を除いた他の歌は採用はしているが、その前に玄々集の歌を新たに入集せしめている如き改修方針をとっているので順序の上にかなり相違をみせている。

他の歌の加除はあっても俊頼の。この歌は、三奏本まで残った歌であった。

(二)「霜」の歌

次の主題は「霜」である。ここでは俊頼は

(1) 住よしの岸のかたそぎ(ちぎ)行きも合はで霜置き(ど)イ
まよふ冬は来にけり

の自詠を一首採用した。これは「堀河院百首」出詠の晴の歌である。そこでは初句が「住よしのちぎのかたそぎ」となっていて、続類従本もこれによっている。ところが、二度

本、三奏本では霜の主題を削除したためこの歌も結局姿を消してしまった。

(三)「雪」の歌

次の主題は「雪」。雪の歌は、冬部のうちでも最も重要な景物で初度本では13首。(他筆一首を除く)、続類従本17首、二度本16首、三奏本19首。漸減方針をとっている三奏本に却って歌数の多いのは、雪の歌を尊重した俊頼の態度がうかがえる。ところが初度本には、雪の歌の中にも

コクヨ B4 20×20

(a)ぬれ〳〵もなほ狩行かんはしたかのうは羽の雪をうち拂ひつゝ（源道済）

(3)はしたかをとりかふ沢にかげ見れば我身もともにとやがへりせり（けイ）（俊頼）

という鷹狩二首の歌があり、(3)の歌は先の「たつた河しがらみかけて」の歌と共に俊頼が初度本から三奏本まで捨てずに採った歌である。「はしたか」を年老いたわが身の姿にみたてるといった主想はいかにも俊頼らしい歌である。

ところで、初奏本金葉集（伝冷泉為相筆本、静嘉堂所蔵）は上巻のみであるが、この中には他筆103首も含まれている。(a)と(3)の間が丁度他筆の個所で

ムことわりや交野の野辺に鳴くきぎすさ

こそは狩の人はつらけれ（内大臣家越後）

の一首を禿筆で補入している。（三行小書き）

この補入歌を純粋な初度本の一首として考えることは勿論誤りである。これは、初度本以後の金葉集を見てのさかしらの加入である。

コクヨ B4 20×20

さて、二度本をみると初度本にはない「岩代の結べる松に雪ふれば春もとけずやあらんとすらん（中納言女王）の一首を新しく採用し他筆であった越後の歌が正式に採用された。これは俊頼が雪の歌の中に鷹狩の心を三首にまとめようとしたはからいの現れとみる事が出来よう。（但し、二度本の精撰本では削除されている。）三奏本では再び越後の歌が生かされ、さらに新しい観点から初度本的編集に回帰させつゝ一方「鷹狩」の歌をはっきり表に出そ

うとした。そのために源道済の歌の次に藤原長能の二首(A)「霰降るかた野のみ野の狩衣ぬれぬ宿かす人しなければ」と(B)「み狩する末野にたてる一つ松とかへる鷹のこひにかもせむ」へ(A)は玄々集から〉を新たに補入した。これを補入すればやはり二度本(精撰本)で削除された越後の歌はその接続上必要になり、生かして自詠の「はしたか」の歌を最後に置きかえて歌の上から「ぬれ〈て」「ぬれぬ宿かす」「末野」「とかへる鷹」「とやがへり

」などの用語上の相互の接続を緊密にしてこに鷹狩の歌五首をまとめた改修態度が窺える。

さて、雪の主題歌の配列については以上の如く俊頼は種々配慮をめぐらしているが、初度本に於て全く取りあげなかった「雪」の歌を続類従本で今一度考え直そうとして新たに入集せしめたのが、

(1) 雪ふれば谷の梯うづもれて梢ぞ冬の山ぢなりける（初句「降る雪に」とも。）

(2) 衣手のさえ行まゝにしもとゆふかづらき山

コクヨ B4 20×20

に雪はふりつゝ

の二首であった。そしてここの小の歌を道清の「ぬれ〳〵て」と越後の「ことはりや」との間に補入して、三首を「雪中鷹狩」の歌としてまとめたことがまず注意される。この歌は散木奇歌集へナニ〜をみると、「高陽院殿歌合に雪をよめる」という詞書をもつ歌であり、特別に鷹狩の歌ではないが、ここに補入すれば狩人の難渋する冬の山路ともなり得るのである。こうした意味もあってか歌の位

置としては、初度本にすでに入集している「はしたか」よりも前に挿入した。更に今一首(ニ)の歌を「雪ふればいやたか山の梢にはまだ冬ながら花さきにけり」（藤原行盛）と「朝ごとのかがみの影におもなれて雪見にとしも急がれぬかな」（六條右大臣）の間に挿入した。ところがこの歌は散木奇歌集では「衣手のさえゆくままに神なびのみむろの山に雪はふりつつ」とかなり異っている。これは散木集を中心に考えれば戎はこちらの方が正しい

コクヨ B4 20×20

かも知れない。いずれにしても「いや高山」と関連をもたせ「みむろの山」の歌（或はかづらき山）を持ってきたものと思われる。

今一歩つき進んで考えれば、ここの雪の歌三首は、いずれもわでたい雪という概念が俊頼の編集意識の底にあったのではあるまいか。

二度本では、俊頼もやや無理と思ったか(ハ)の歌は削ったが(ロ)の歌はそのまま生かした。ところが三奏本になるともう一度考え直して、「神なびのみむろの山」の歌はすでにもみぢ

の歌として採用しているし、ここでは「みむろの山」にしても「かつらぎ山」にしても、神の山の再出をさけていの自詠は漸減の方針で立を削ったものだろう。以上の様に大きく雪を主題として更にはそれを種々の場の雪ここでは例えば鷹狩という雪の中での各々の場面の小題と相からんでかなり編集上に配慮を重ねた様子がみえる。そして結局は、三奏本に於て冬の歌は僅か二首に整理したのであった。以上のことを表示すれば次の如くになる。

コクヨ B4 20×20

冬の部（五首）	1	2	3	4	5	計
	たつた河しがらみかけて神なびのみむろの山のもみぢをぞ見る	住吉の岸（ちぎ）のかたそぎゆきも合はで霜置きまよふ冬は来にけり（続類本）	はしたかをとりかふ澤にかげ見れば我身もともにとやがへりせり	雪ふれば谷の梯うづもれて梢ぞ冬の山ぢなりける	衣手のさえ行くまゝにしもとゆふかつらき山に雪はふりつゝ	
初度本	○	○	○	×	×	3
続類従本	○	○	○	○	○	5
二度本	○	×	○	×	○	3
三奏本	○	×	○	×	×	2
頻度数	4	2	4	1	2	13回

る。

(五) 賀の部

賀の部の歌数は、少なく初度本で実数31首。ただ前後に、源師俊の歌一首と俊頼の歌二首「君が代は松のうはばに置く露のつもりてよもの海となるまで」と「くもりなく豊さか昇る朝ひには君ぞ仕へんよろづ世までも」の歌が他筆で書き込んでいる。この他筆は、続類従本以降のを見ての書きこみで純粋でないの

で31首というのはこの三首を差し引いての数で初度本には俊頼の歌は一首も採用していないのである。続類従本の歌数は29首、二度本もこれと同じ数である。（但し、歌の内容については匡房と俊頼の作品の入替えあり）、三奏本は27首である。

さて、俊頼の歌は続類従本になって始めて

①君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで

②くもりなくとよさかのぼる朝日には君ぞつ

かへむ万代までに

の二首が正式に採用された。

①は「堀河百首」出詠の「祝」の歌、②は善子斎宮を祝った時の歌である。散木集にはこの時の歌十首をのせている。

初度本にあっては、例の如く古今集歌人貫之の歌が三首もあり、自歌を一首も入れていなかったのを続類従本においては貫之の三首、拾遺集歌人大江嘉言、恵慶法師の歌二首を削り、当代歌人源師俊の歌などを補入し、併せ

て、俊頼の歌として

。「おちたぎつ八十うぢ河の早瀬に岩こす浪は千世のかずかも」を補入した。この歌は、京極の前太政大臣師実公の高陽院の歌合において詠んだ歌で、定家が近代秀歌において「晴の歌、秀歌の本躰」と推奨した歌であり、千載集にも入集している。初度本では俊頼のこの歌の個所には、大蔵卿匡房の「君が世はかぎりもあらじ御笠山峯にあさ日のさゝんかぎりは」の歌が実はあったのであるが、これを

削って自詠歌挿入した形になっている。しかし二度本では自詠を再び削除して匡房の歌を復活させた。これはそのまま三奏本にも続く。三奏本では貫之こそ削除したまま再生復帰することはなかったが、一度削除した大江嘉言、恵慶法師の歌を再生させた如きは、初度本に帰る態度に外ならず、結局、俊頼自身の歌も、全く採用されなかった初奏本に立ち帰り、三奏本においても俊頼の歌は遂に一首も採用しなかったのが賀の歌の部であった。自詠をい

わば持駒としてある時は入れ、ある時は削る。
といった材料に使った態度がこの賀の歌でも
見られる。表示すれば次の如くなる。

コクヨ B4 20×20

賀の部（三首）	1	2	3	計
	君が代は松のうはばにおく露の つもりて四方の海となるまで	おちたぎつ八十うぢ河の早き瀬に 岩こす浪は千世のかずかも	くもりなくとよさかのぼる朝日には 君ぞつかへん万代までに	
初度本	×	×	×	0
続類従本	○	○	○	3
二度本	○	×	○	2
三奏本	×	×	×	0
頻度数	2	1	2	5回

(七) 恋の部

(六、別離の部には俊頼の歌は一首も含まれていないので省略。)

静嘉堂文庫所蔵の伝冷泉為相本金葉和歌集は初度本としてこの文献価値は高いのであるが、巻五までの上巻のみで下巻は欠けているので諸本との比較の対象になり得ない。

続類従本恋部上の歌数は71首。下巻が87首。計158首。二度本の恋上の歌数は77首。下巻が102首。計179首で二度本の方が続類従本より22首多い。それが三奏本になると激減して恋上

の歌数が60首、恋下が82首、計142首となっている。

さて、恋主題の歌の構成は、「はじめたる恋」に始まり、やがて種々な恋の場面へと展開してゆく。人間の抒情的面を代表する素材として歌の数も多くなるのは当然であり、金葉集に於ても遂に上、下の二巻に分冊した。分冊したのは歌数多き故であり、上巻と下巻により恋の歌の上に素材的に区別されるものではないが、ただ雑然と配列したのではない。

コクヨ B4 20×20

そこには俊頼の編纂意識が大いに動いている。俊頼の恋の歌数は諸本により異なるのであるが、それがどの様に配列され異動があるかについて考えてゆきたい。まず、続類従本では五首（上巻4首、下巻1首）採用した。次に俊頼の歌を中心にその前後の歌をあげると次の通り。

(A) あらかりし風の後より絶ねばくもでにすがく糸にやあるらん（相模）

①よとともに玉ちる床のすが枕みせばや人に
よはのけしきを　源俊頼朝臣

(13)あやめにもあらぬまこもを引かけしかりの
よどのの忘られぬかな　相模

後拾遺集歌人相模の歌を前後にし、その間
に自詠を配置させたのは、「すがく糸」↓
「すが枕」↓「夜半」↓「あやめ」↓
「よど」という語韻、語彙により恋の主題が
展開されてゆくのである。この配列は二度本

もそのまま継承した。ところで、俊頼は二度本において新たに前の方に

②わが恋はおぼろの清水いはでのみせきやるかたもなくて暮しつゝとしよりの朝臣）

の一首を(C)「これにしくおもひはなきを草枕たびにかへすはいなむしろとや」（春宮大夫公実）と(D)「あふとみて現のかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける」（藤原顕輔）の間に補入した。②は散木集をみると「別当実行の六條の家の歌合に寄泉恋をよめる」

の詞書をもつ歌であるが、二度本では「後朝の心」という心境的な詞書に変えて(c)↓②↓(D)と続かせたのである。ところがその署名は「としより朝臣」へ「源」がない」と略式な書き方になっている。これは極めてぞんざいな書きぶりで、詞書きの変更などもかなり無理な改編であった。そうした意味からか三奏本では②を削除し、①の歌をここに持ってきた。そのため、(c)↓①↓(D)という順序になり語句的にも草枕↓菅枕↓はかなき夢という

はかない恋の主題の展開がここに形成された。これを続類従本の相模↓俊頼↓相模に比すとここには公実↓俊頼↓顕輔という新しい当代歌人の作品接続が別に出来上ったのである。そのために続類従本・二度本の相模の歌二首の処置をどうするかにつき切るか生かすか。

俊頼はこのすぐれた歌を切るにしのびず残こすことに決め位置を移動させたばかりでなく、更に新しく

(E)君待つと山の端いでて山の端に入るまで月

をながめつるかな（相模）

(下)なか〈に言ひもはなたで信濃なる木曽路の橋にかけたるやなぞ（源頼光）

の二首を(A)と(B)の間に補入した。（(下)は玄々集から採用）これは三奏本の特色である。

次に三奏本まで採用した俊頼の歌に

③いつとなく恋にこがるる我身よりたつやあ（きこイ）さまの煙なるらん

の一首がある。その前後を続類従本、二度本でみると

(G)逢みての後つらからばよゝをへてこれより
増る恋にまどはん（皇后宮式部）

③　俊頼の歌

(H)後の世と契りし人もなき物をしなばやとの
みいふぞはかなき（藤原成通）

と三首の接続の順位は同じ。(G)は恋を地獄の
火にたとえ、(3)はその縁として「恋にこがる
ゝあさまの煙」(H)は「恋に死ぬることのはか
なさ」という重苦しい恋の主題の展開である。
ところが三奏本になって③は「恋下」の方に

位置を移動させた。ここでの前後三首をみると、

(エ) 行方なくかき籠るにぞひきまゆのいとふ心の程は知らるる（前斎院六條）

③ 俊頼の歌

(オ) 君こそは一夜めぐりの神と聞けなにあふ事の方たがふらん（読人知らず）

の如くなっている。こうなると(エ)↓③↓(オ)とつづきいずれも「ゆくへなくはかなくただよふ恋」の想いを主体とした展開になり、前の

三首一連とはかなりちがったものになる。さて、二度本の(エ)の歌以下三首をみると、

(エ)「前斎院六條」の歌

(K)人はいさありもやすらんわすられてとはれぬ身こそなきこゝちすれ（よみ人しらず）

◎

④なこそこふ事をば君がことぐさをせきの名ぞともおもひけるかな（源　俊頼）

と展開し、(エ)↓(K)の順位は続類従本と同じであるが、④の俊頼の歌が、二度本に始めて補入した歌であることは注意すべきである。

ところが三奏本では、④は削除し、③をここに移動させて結局③の歌は続類従本以来ずっと残存することになったのである。③の歌はその意味で俊頼のいわば持ち駒でその場所をどこにするかという配列については種々苦心を拂ったあとがみられる。三奏本では④の歌は消えたが流布本（二度本）では③・④二首とも残存したことになったのである。

次の俊頼の歌に

⑤思草葉末に結ぶ白露のたま〳〵きてはてに

もたまらず

の一首がある。この歌は、続類従本と二度本には採用されたが、三奏本においては削除された。その周辺には異動がある。まず続類従本の前後三首の配列をみると次の如くになっている。

(L) うたゝねにあふとみつるは現にてつらきを夢と思はましかは（藤原公教）

⑤ 俊頼の歌

(M) 蘆ねはふ水の上とぞ思ひしにうきは我身に

ありけるものを（春宮大夫公実）

⑤の歌は、中納言俊忠の家で詠んだ恋の歌十首中の一首。この三首とも「はかなくて」れない恋」を主想としたもので、接続もそうした心情の展開になっている。ところが二度本では、⑤の前に

（N）ふく風にたへぬこずゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり（源　雅光）

の一首を補入している。これは、摂政左大臣家で「寄レ花恋」の題で詠んだ歌。するとこ

れは、摂政左大臣家で「寄」花恋」の題で詠んだ歌。するとこれは、(L)夢→(N)花→(5)自露→(M)蘆根というはかない美の対象によって接続しているように思われる。

三奏本になると、俊頼は思いきって自詠の(5)を削除し、(L)と(M)の二首のみを残して編集の単純化を計ったのである。

次の俊頼の歌は

⑥ 忘草しげれる宿をきてみれば思ひのきよりおふるなりけり

の一首で、これは三奏本までずっと採用された歌である。その周辺三首は次の通り。

(o) さきの世の契をしらではかなくも人をつらしと思ひけるかな（前中宮上総）

⑥ 俊頼の歌

(P) 今よりは思もいでじ怨めしといふもはたのみかつるかぎりぞ（よみ人しらず）

※いふもたのみの（流布本）

この三首は「恋のうらみ」を主題にして展開し、続類従本、二度本の配列も全くこれと同じであるが、三奏本になると、⑥は上巻に

移動させ、その前後の歌にも左の如く異動を生じた。

(Q) 涙川袖のゐせきも朽ちはてて淀むかたなき恋もするかな（皇后宮右衛門佐）

⑥ 俊頼の歌

(R) かくとだにまだいはしろの結び松むすぼほれたるわが心かな（源顕国）

二度本では(Q)・(R)は同じ「題知らず」というもとにまとめられているが、三奏本では俊頼の歌⑥が、この間に割り込んだため(R)には

「初恋の心を」と新しく題をつけざるを得なくなった。これは、おそらく編集上から俊頼がこの様な題詞をつけたものと思われる。

俊頼がなぜ⑥の歌を三奏本では上巻のここに移さねばならなかったのか。恋の歌の内容そのものの接続についてはどちらも無理ではないが、作者から考えると前者のほうは「よみ人しらず」となっている。俊頼は、自詠をそこにおくよりも、三奏本の如く、皇后宮右衛門佐→俊頼→顕国と当代歌人三人の接続の方

をとったのではなかろうか。

次の俊頼の歌に

(7) あさましやこは何事のさまぞとは恋せよとても生れざりしに

の一首がある。続類従本では、この歌を以て「恋部下」の最後にすえた。ところが二度本に於ては、さらに次の二首がその後にある。

(5) つらかりし心ならひに逢ひみてもなほ夢かとぞうたがはれける（源行宗朝臣）

(8) あやしきも嬉しかりけりおとしむる其の言

の業にかゝると思へば（源俊頼朝臣）

このうち、(ふ)は実は「恋部上」にすでに「俊朝の心を読る」として出ているので重複歌になっている。このような重複は二度本の不備を示すものである。

二度本でも精撰本と言われる伝慈鎮筆本、伝為忠筆本、伝為明筆本、伝兼好法師本などの諸本にはすでにこの歌は削られているから当然、これは削らるべきである。従って二度本に於ては⑧の俊頼の歌のみが追加されたこ

となるが、三奏本ではまた⑧は削られた。

以上の如く「恋部」の配列については特に三奏本に異動多く、歌は削減をたどり僅か三首という結果になった。表示すれば次の通り。

恋の部（上・下）（八首）	1	2	3	4	5	6	7	8	計
	よとともに玉散る床のすが枕 見せばや人によはのけしきを	いつとなく恋にこがるゝ我身より 立つやあさまの煙なるらむ	思草はず忍にむすぶ白露のたま〳〵 きてはてにもたまらず	わが恋はおぼろの清水いはでのみ 堰きやる方もなくて暮しつ	あさましやこは何事のさまぞとは 恋せよとても生（生れざりけり）二度本れざりしに	なこそてふことをば君が言ぐさを 関の名ぞとも思ひけるかな	寄しきも嫌しかりけりおとしむる その言の葉にかゝると思へば	忘草しげれる宿を来てみれば思ひの きより生ふるなりけり	
続類従本	○	○	○	×	○	×	×	○	5
二度本	○	○	○	○	○	○	○	○	8
三奏本	○	○	×	×	×	×	×	○	3
頻度数	3	3	2	1	2	1	1	3	16回

(八) 雑の部

金葉集の部立として才九、才十が雑部上下の最終を飾る。金葉集の特色として雑下の最後に「連歌」の部を独立させた事は俊頼の新

しい編集意識の具体的なあらわれである。雑の歌はいわゆる「くさぐさ」のうたであり、四季的素材もここにはあるが、四季の歌そのものとは自から異なり、雑にはその作者の生活背景というものがひそんでいることが特色である。作者の生き方を中心にその作者の社会的環境、位官などを始めとしてさまざまにその人を語ってくれる。

ここに他の部立ではみられないものがあり、俊頼の名歌一首よりも、たとい凡作であって

も雑歌の中には人間俊頼の映像が表出される。

これは勅撰集に限った事ではなく例えば俊頼家集の散木集雑歌でもそうであり、歌数も最も多く彼の人間・生活はこの雑歌に多く見られるところである。

金葉集雑歌の歌員数は類従本において152首（上88首・下64首）二度本161首（上91首・下70首）、三奏本135首（上89首・下46首）である。

さて、この中俊頼の歌は続類従本に7首（

上5首・下2首）ある。次にその一首ずつについて考えてゆく。まず、前後周辺三首を並べてみると

(A)おもひかねけさは空をやながむらん雲のかよひぢかすみへだてて（藤原家綱）

①いくかへり花さきぬらん住吉の松も神代のものとこそきけ（源　俊頼）

(B)ますらをは山田のいほに老にけりいまいく秋にあはんとすらん（中納言基長）

この三首をみると(A)は、蔵人をおりた基清

を思って家綱のよんでつかわした歌であるが、俊頼の①は、題材の上からは断絶がある。袋草紙（上巻）によると、この歌に対して故将作当座を難じて「松は神代のと可仕と云々。俊頼無左右之答」。と言ったと伝えている。清輔はこの事について「予案之、共以有理、有興云々」と両方の説を肯定している。原作「松も」とあるより「松は」とあるべきだと批評されたのである。住吉の松は神代のものだからいくたび花が咲いただろうかとい

う祝いの心をこめた歌であり、一品宮に供奉し天王寺に詣でた時の俊頼の心懐である。この「いくかへり」をうけて(3)は「今いく秋にあはんとすらん」と接続する。(1)の歌は題材からいえばその前五首がすべて任官に関する一群の歌に属し、その最後の歌に位置し、俊頼の歌は次の新たな地方田園をよんだ歌群五首の最初を飾る一首である。この五首の次は又新たに月の主題歌に発展するといった連句的手法をとってすすむ。

さて、この三首の順位は二度本でも同じであるが三奏本では甚だしく改修している。

まずその大きな理由は、続類従本、二度本共にあった(A)を削除した事から、この周辺に新たに玄々集から三首補入し、(A)の代りには他から（玄々集からではない）新たに、

(C)「住吉の松のしづ枝を昔よりいくしほ染めつ沖つ白波」（太宰大貳長実）

の歌一首を補入したためである。

俊頼のこの意図の底には続類従本、二度本

に於て断絶していた歌を削除し、接続を密にするため新たに「松の主題」の歌をここに配列しようとした事である。玄々集の他の新入三首は次の通りである。

(D)思出もなきふるさとの山なれどかくれ行くはたあはれなりけり（大江正言）

(E)まことにや人の来るには絶えにけむいく野の里の夏引の糸（藤原兼房朝臣）

(F)行末のしるしばかりにのこるべき松さへいたく老にけるかな（源道済）

以上の四首の中(D)・(E)二首は、さびしい山里の暗い想出の主題であり、(F)は河原院の松に主題を転化し、そこから更に(C)の宮中関係に於て詠んだ「住吉の松」の場面へと導き出し俊頼自身の「いくかへり」に続けた改修は、まことにあざやかな手法と言うべきである。そしてここで「松の主題」を終結させた。そのために続類従本の「ますらを」以下6首は全部削除して次に同じ宮中関係の(ここでは郁芳門院斉宮にての詠)

(D)はやくより頼みわたりしすゞか河思ふことなる音ぞ聞ゆる（六條右大臣北方）

(E)琴の音や松吹く風に通ふらん千世のためしにひきつべきかな（摂津）

の二首に続かせた。

これはまた新しい展開となった。

この「いくかへり」は、三奏本までのこった歌の中の一首。一体に雑部は他の部立の歌に比して続類従本から三奏本まで削除されずに残った歌が十首の中七首もある。おそらく

初奏本にも採られた歌だったと思われる。この事は、俊頼が「雑部」に入れた歌については編集上、初奏本から余り削る必要もなかったもので、逆に言えば、四季とか恋その他の歌よりも独立性の強い歌であったためである。接続させる上での編集技術も、さきに述べた様に配慮は勿論しているが、比較的に自由に出来たようである。

次の歌に、俊頼の

②なきかげにかけけるたゞもある物をさやつ

かのまに忘れ果てけん（ける）イ

の一首がある。この前後には次の如き歌がある。

(ア) 日かげにはなき名たちけりをみ衣きてみよとこそいふべかりけり（源光綱母）

② 俊頼の歌

(イ) 見し人はひとり我身にそはねどもおくれぬものは涙なりけり（僧正行尊）

この三首のつづきは皆夫々に背景の異った場にある雑の歌であるが、接続の面からみる

と、やはり配慮をめぐらしている。なき名↓なきかげ↓見し人などの用語は同音、或は内容的につながりをもつもので、ことに俊頼のこの歌の素材が史記の故事からとったものであり、それは(G)の詞書「大みねの神仙といふ所にひさしく侍ければ、……」にうけつがれていると解釈されるのである。歌の背景の事柄としてはそれぞれ異なってはいるが、その間には何かの脈絡をつけている面が雑歌にも見えるのである。この三首の配列は三奏本ま

で変りはない。

今ひとつ、中国故事に関係ある俊頼の歌とその前後をみると、次の如きものがある。類従本によって示すと次の通り。

上陽人苦最多少思苦老亦苦といふことをよめる

(H) 昔にもあらぬ姿になりゆけばなげ(ど1)きのみこそ面がはりせぬ　（源　雅光）

青黛畫眉細長(と)いふことをよめる

③ さりともとかくまゆずみのいたづらに心ぼ

そくも老にけるかな（源俊頼）

（I）心こそ世をばすてしかまぼろしの姿も人にわすられにけり（僧正行尊）

この三首の主題は「老」であり、うち（H）・③はいずれも老を歎くことを「止陽人」の故事にならって詠んだ所に関連をもつ。その詞書も白氏文集新楽府によっている。

彼女は楊貴妃に妬まれて上陽宮に押し込められ60才まで物思ひに沈んで暮したという人。「むかしにもあらぬ姿」とは上陽人の白髪た

ることの嘆きであり、俊頼が、それをうけて「さりともと」と発想したのも上陽人の心をとったものである。この二首の続きは、勿論その後に接続する(エ)の心境も直接(H)・③の様に中国故事ではないが、「まぼろしの姿」などの用語は老の主題につながる。以下この配列は続類従本から三奏本まで異同はない。「雑部上」の最後の方は、述懐の歌九首で打止めにしているが、この歌群の最初と最後から一首前に俊頼の歌が二首ある。次の通り。

④世中はうき身にそへるかげなれや思ひすつれどはなれざりけり

この歌は「堀河院百首」の中の述懐歌として出詠したものであり、三句を「や」でとめた技巧もよくきいているし、俊頼的な境涯歌というべき作品であり、千載集にも採用された。

他の一首は、

⑤日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲がくれつ、

この歌は、散木集第九雑部の巻頭を飾る作で

俊頼がわが子伊勢守俊重の春の除目に式部丞たるべき申文を重資に上奏した時の述懐歌である。

この歌にすぐ続いて

(丁)何か思ふ春のあらしに雲はれてさやけき影は君のみぞ見ん

の一首があり、雑部上は終幕になっている。

この歌は俊頼に応答した形になっておりニ度本には「其たびなりにけりと云々」という注があり、これは八代集抄にも「俊重式部に

なりしと也」と注釈を加えている通り、めでたい歌で雑部上の最終の歌を編集したことである。ここで一つ注意すべきは

⑥須磨の浦に塩焼くかまのけぶりこそ春にしられぬ霞なりけれ（俊　頼）

の一首が三奏本になって始めて補入されていることである。この歌の前後四首をみると、

(K)大江山いく野の道の遠ければ（まだふみもみず）ふみもまだみず天の橋立　（小式部内侍）

(L)家の風吹かぬものゆゑはづかしの森の木の

葉を散らしつるかな　（藤原顕輔）

⑥俊頼の歌

(M)鷺のゐる松原いかにさわぐらんしらげばう
たて里どよみけり　（和泉式部）

さて、⑥は詞花集にも採られ俊頼には自信の歌であったろう。

ところで、(L)・(M)二首は、続類従本では直接しておるが二度本では(N)「いそなつむ入江の波のL（平康貞女）と(O)「ながゐするあまのしわざとL（むすめ）の母娘贈答歌二首が

その間に介在している。（続類従本では、(N)・(O)は、前の方に位置す）これを三奏本と二度本を比較してみると二度本の(N)(O)を削除して⑥を新たに一首補入したことになる。二度本の(N)・(O)は海に関係した二首で必ずしも必要でないと認めたためであろう。さらに(K)と(L)の間には「うたたねの夢なかりせば」（顕季）と「さ夜中におもへばかなし」（師頼）の堀河百首を入集せしめたが、これも思い切って削り、結局、三奏本に於ては四首を整理

し、大江山↓はづかしの森↓須磨の浦↓石山寺といういずれも地方名所の系列となり、ここに新しい展開を配慮したものである。

次に「雜部」下に移る。ここで採られている俊頼の歌は全部で三首。その中、続類従本から三奏本までに残存した歌は次の、

下ろうにこえられてよめる

⑦せきもあへぬ涙の河ははやけれど身のうき草は流れざりけり

の一首のみである。雜部下の構成の特色とし

ては哀傷歌と、釈教歌のある事でこの一首は前の哀傷の歌の間に配列されている。⑦は述懐の歌で地位の低い者に官がこえられた身の不運をかこった歌である。散木集では「思ふ事侍ける頃よめる」とあり、却って漠然としているが金葉集にはっきりと具体的な詞書になっている。それにしても前の歌が続類従本では、

(ア) うかりしに秋はつきぬと思ひしをことしも虫のねこそ流るれ（康資王母）

という亡き都芳門院を偲びての歌であり、そのあとも

(Q) 玉匣かけごに塵もすゑざりしふたおやながらなき身とをしれへよみ人しらず〉

の哀傷歌である。この間にはさまれての⑦の述懐歌は接続としては拙い編集のようにも思われるが、他に捨子の哀れさを詠んだ歌などもあり、広く人生の哀れさを主題とした配列と思えばこの歌の意味的位相もわからぬではない。

次に続類従本では釈教歌群が24首ある。（二度本26首、三奏本22首）この中、俊頼は左の自歌一首

⑧あみだぶと唱ふる声をかぢにてやくるしき海をこぎはなるらん

を最後にすえて釈教歌の終幕としている。これは二度本、三奏本共に同じ。ここで注意すべき事は、二度本に於て俊頼の釈教歌として

△よもの海の波にたゞよふ水屑をも七重の網にひきなもらしそ

の一首を採用しているが、これは誤謬である。

この歌は散木集にもない。二度本の精撰本（雅春本）には、この歌は採用しているが作者名を「源師俊朝臣」と記している。この方が正しい。三奏本にないのは当然である。さて、続類従本の最尾に

⑨七十にみちぬるしほのはまびさし久しく世々にむもれぬるかな

の一首があるがこれには詞書も作者名も逸している。二度本になって

「七十になるまでつかさもなくて、よろづにあやしきことを思ひつづけて」

という詞書と作者名が附された。しかし、この歌の配置が連歌の配列の終った大尾にあることは歌として置いたということではなくて金葉集編集を記念するためであったと思われる。またこの歌は金葉集成立年代についていろ〳〵の問題を提出してくれる意味において極めて重要な一首である。

「雑部」の俊頼の歌を表示すると次の通り。

雑の部（上・下）（九首）

		続類従本	二度本	三奏本	頻度数
1	いくかへり花咲きぬらむ住吉の松もかみ代のものとこそきけ	○	○	○	3
2	なきかげにかけける太刀もあるものをさやつかのまに忘れ果てぬる	○	○	○	3
3	さりともとかくまゆずみの徒らに心ぼそくも老にけるかな	○	○	○	3
4	世の中はうき身にそへるかげなれや思ひすつれどはなれざりけり	○	○	○	3
5	日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲がくれつゝ	○	○	○	3
6	須磨の浦に塩焼くかまの煙こそ春にしられぬ霞なりけれ	×	×	○	1
7	せきもあへぬ涙の河ははやけれど身のうき草は流れざりけり	○	○	○	3
8	あみだぶと唱ふる声をかぢにてや苦しき海をこぎはなるらん	○	○	○	3
9	なゝそぢにみちぬる潮のはまびさし久しく世にもむもれぬるかな	○	○	×	2
計		8	8	8	24回